
幸福の在り処

高良あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福の在り処

【Nコード】

N1708K

【作者名】

高良あくあ

【あらすじ】

「信じる、なんて言わないわ。それでも、貴方達に信じてほしいの」

孤独な世界から逃げ出してきた少女、エレナ。辿り着いた異世界で出会ったのは、生まれ持った強い魔力のせいで迫害された子供達、そしてそれを護る青年だった。ようやく居場所を見つけた少女は、自分に居場所をくれた子供達と青年の幸福を求める。ほのぼの異世界ファンタジー。第二章開始しました！ 続きはサイトにて先行公開中。

プロローグ

「おいっ、どっちだ!？」

「向こうだ、向こうに走って行った!」

「くそっ、『能力』は低いくせに、手こずらせやがって……急いで追うぞ!」

そんな怒鳴り合いが段々と遠ざかっていき、辺りは暗闇と静寂に包まれる。

聞こえるのは自分の、荒い呼吸のみ。

「……それ以外は決して低くないと言われていることは、知っているでしょうに」

呟きながら、呼吸を整える。

……『能力』の方も向こうがそう思っているだけかもしれないけれど。脳ある鷹は爪を隠す、と言うし。まあ、私が隠しているのは自分が鷹ではなく、自分を想ってくれる鷹にそうするよう言われたからなのだが。

さておき、追っ手は、簡単に罠に嵌ってくれたようだ。

……しかし、ここでじっとしていれば、見つかることは避けられない。彼らも馬鹿ではないのだ。自分達が追っている方向に標的がないことに気付くのもすぐだろう。

逃げなければ。

何処へ？

そう、自分の中の冷静な部分が問いかける。

東宮の影響力、権力は、国家のそれに匹敵する。この国にいと
いう選択肢は無い。そんなことをすれば、あつと言う間に見つかる。
では外国へ？

それも出来ない。国家規模の権力に対して、ろくな情報網すら無
い私が、たった一人で抵抗出来るわけが無い。そもそも私はパスポ
ートすら持っていないし、例え持っていたとしても空港辺りですく
に気付かれるだろう。

……いつそ、死んでしまうか。

胸の奥に浮かんだ、そんな思いを振り払う。それでは本末転倒だ。
死ぬのが嫌で、あんな束縛された生活が嫌で、両親から向けられる
視線に耐えられなくて、こうして逃げてきたのに。

結局、何処にいても……私は、幸せにはなれないと言うことが。
なら、せめて足掻こう。最後の最後まで。

どうせ死ぬのなら、その最後の瞬間、笑えるように。私は貴方達
に勝つたのだと、東宮の『能力者』達を嘲笑えるように。

どんどん考えが良くない方向に歪んでいくけど、幸か不幸か、そ
れ以上歪むことは無かった。

そこまで考えた時、不意に足音が聞こえたから。

しまった、もうここまで！

「おい、いたぞ！ こっちだ！」

その声が終わる前に、走り出す。後ろから複数の足音が聞こえる
が、振り返って人数を確かめる余裕は無い。

少し走ると目の前が開け、大通りに出る。今は夜だが、それなり

に人はいる。もちろん、ここに出たのは意図してのもの。これで追っ手が周りを気にして、武器の使用を避けてくれたら良いのだけだ……

そんなわけは無いと、自分でも分かる。東宮に雇われるような人間なら、一般人に当たらないように攻撃することは容易いだろう。そして、世間体を気にするような人間でもない。どんな事態になっても打ち消せるから、きつと周りの目なんて気にしない。

だから、逃げる。

やがて、町外れを流れる川に架かる、大きな橋の上に出る。

真ん中辺りまで来たところで……反対側からも、追っ手と見られる人間が数名。

……困まれた、か。

私は嘆息すると橋の欄干に腰をかける。

追っ手は立ち止まり、先頭にいたリーダー格の男が話しかけてきた。

「やれやれ……お嬢様、我々と一緒に来ていただきますよ。何処へかは、聡明なお嬢様ならお分かりでしょう」

「ええ、分かっていますよ」

首肯する。

……東宮から彼らへの命令は、恐らく私を東宮家に連れ戻すこと。怪我は負っても良い、ただし生きた状態で……そんな感じだろう。

でも、彼らは甘い。

「貴方達　東宮の思い通りにはなりません。いいえ、させません」

私は欄干に腰掛けたまま、上着を脱ぐ。流石に下着だけになる勇

気は無い。外見の問題もあるが、それ以前に今はそろそろ冬に入るうかという時期だ。

足掻くと決めた、だから足掻く。運が良ければ、きっと死なないだろう。

「お嬢様？ まさか……おい、誰か止めろっ！」

「知っていますか？ 私、泳ぎは割と得意なんです」

追っ手がこっちに走ってくる。その手から逃れるように、後ろに倒れこむ。当然後ろには何も無く、私はそのまま頭から落ちる。

重力に逆らう事無く、川に吸い込まれて。

一瞬。

頭上の暗闇に光が見えたような、そんな気がした

第一章 始まりの場所に・前編

「……………何だ？」

夜も更け、そろそろ寝ようかと立ち上がった瞬間。

俺は、不思議な感覚に襲われた。

……………恐らくこの近隣で、大きな魔力の動きがあったのだろう。魔法生物でもいるのか、誰かが大規模な魔法でも使ったのか、それとも腕の立つ魔法使い同士が決闘でもしているのか。

魔法生物ならまだ良いが、人や魔法使いの仕業だとしたら。その人間がここを訪ねてくるのは……………相手にもよるが、大抵の場合あまり良い事態とは言えない。

天井を見上げる。上の階にいる義弟達や義妹は、とっくに寝ているだろう。

「……………少し、見てくるか」

これほど大きな魔力を一度に動かすほどのものなら、それが何であるうと『今の俺』にはどうすることも出来ないだろう。だが、せめて正体くらいは掴んでおかなければ、いざという時に困る。その『いざという時』が異常に多いここではなおさらだ。

上着を取り、羽織りながら意識を外に向ける。

魔力が動いたのは……………どうやら小さな森を一つ抜けた先、草原の中央辺りのようだった。

「う……………」

目を開けると、頭上には満点の星空が広がっていた。
私はゆっくりと体を起こし、辺りを見渡す。

「ここは……？」

どうやら私が倒れているのは草原のようで、何となく、ここが元いた場所。日本では無いことを悟る。それは直感のようなもので、だからこそ確信をもってそう言える。

つまり、私は……逃げられた？ あの家から？

それはまだ分からない。東宮で育ってきて、多少の超常現象なら受け入れられるようにはなっている。が、ここがどこであるかは、まだ分からないのだ。よほど小さな国の辺境でも無ければ、あつと言う間に東宮に連れ戻されるだろう。

とりあえず立ち上がろうとすると、遠くから足音が聞こえ……私は思わず固まってしまふ。

野生の動物か何かだとしたら、大きさや種類にもよるか。運が良ければ『力』を使って脅かせば逃げていくだろう。

人間だとしたら……とりあえず、相手が善人であることを祈るのみか。

無意識に、首に下げている銀のペンダントを握り締める。剣と十字架を象った、幼い頃から肌身離さずつけているもの。これを外すことになるのは避けたいところだ。流星に人を殺したくは無い。

足音が段々とこっちに近付いてくる。私はその方向に目を向ける。

現れたのは、恐らく私と同じか少し上くらいの年齢の男性だった。

黒い髪に、落ち着きと知性を感じさせる蒼い目。間違いなく日本人では無いだろう。

「君は……魔法使い、じゃ無いみたいだな。どうしてこんなところに？」

男性は訝しげに、そんな言葉を口にする。その中に出てきた単語に驚き、私は思わず聞き返した。

「魔法、使い……？」

その単語は、物語の中でなら何度も見たことがあるけど、現実で聞いたことは無いものだった。

『似たような力』なら私も……否、東宮の人間なら誰でも使えるけど、『魔法』と言うものは存在しない。東宮によって徹底的に調べられていることだから、間違いは無い。

……つまり考えられるのは、一つ。

「ここは……私のいた世界じゃ、無い？」

思わず呟いた声が聞こえたのか、彼は眉を顰める。

「どづいつことだ？」

「あ……何でもありません。忘れてください」

「構わないが……」つだけ確認させてもらおう。君は、『保護施設』に用があるわけじゃ無いんだな？」

「保護施設？」

訊ね返すと、彼は一瞬驚いた後、面白そうに笑い……あろうことか、私の隣に座った。……少し離れているからまだ良いものの、ま

ともに男性と話したことの無い私からすれば既に赤面モノだ。
そんな私の心境を知ってか知らずか、彼は僅かに笑みを浮かべ、
私の方を見る。

「君は、知らないんだな？ 『保護施設』のことも、そこに住む子供達のことも」

「何ですか、それは？」

思わずそう返すと、彼はまた笑う。

とても面白そうな、楽しそうな、だけど落ち着いた雰囲気のままの、私には浮かべられない笑みを浮かべる。

「君はさっき、『ここは自分のいた世界じゃない』と言っていたな」

「ええ。……まだ、分かりませんが」

「君のいた世界は、どんな世界なんだ？」

……どんな世界。どんな世界だっただろう。

私にとつての『世界』は、ただ私を苦しめるものだった。終わらない苦しみ、抜け出せない地獄、孤独、私だけ置いていかれたみたいで！

「どうかしたのか？」

男性が驚いたように訊ねてくる。

……表情に出っていたか。私は慌てて、さっきまでの 普段の無表情を装う。

「何でもありません。……そうですね、私のいた世界は……貴方がさっき口にした『魔法』などと言うものは殆ど無い世界です。もちろん例外はありますが」

「そうか、じゃあ君の推測は当たっているな」

その言葉に、確信する。それじゃあやっぱりこれは、

「異世界……」

「君からすればそういうことになるだろうな、ここは。俺はそういうことには詳しくないから、断言は出来ないが……」

「いえ、十分です」

首を横に振る。私の表情こそ変わらないだろうけど、恐らく声はほんの少しだけ明るくなっているだろう。

だって、そうでしょう？

つまりここは東宮の支配の及ばない場所で、

つまり私は、東宮から逃げられた、ということになるのだから。

……しかしそうになると、別な問題が浮かんでくる。

「訊ねてもよろしいでしょうか。ここはどういう世界なのですか？」

「ああ、そうだな……それに答える前に、俺からも一つ訊ねたい。

君に、行く当てはあるのか？」

「あるわけが無いでしょう」

見知らぬ土地どころか、見知らぬ世界なのだ。

当然の答えを口にする、男性は頷く。

「そつだろつな。……なあ、うちにこないか？」

「え……？」

思わず男性を凝視してしまう。彼はハッと気付いたような表情に

なり、顔を赤くして否定する。

「あ、いや、変な意味じゃないんだ。そう言う意味で言ったんじゃない。……今日はもう遅いだろう。ここの周りは見ての通り森ばかりで、一番近い街でも歩くと一時間はかかる」

そんな男性の言葉から、『ああ、時間の数え方は同じなのか』などと呑気なことを考える。

しかし確かに森ばかりなのも事実で、ついでに森なのだから当然野生の動物などもいるはずだ。そんな場所を夜に歩くのは、危険極まりないだろう。

……ふと。何故そんな場所に住んでいるのか、という疑問が浮かぶ。一時間歩いたところに町があるのなら、最初からそこで暮らすべきだと思っただけだ。

彼はそんな私の思いは知らずに続ける。

「だからだな、その……とりあえず一晩だけ泊まっていられないか、ってことだ。話はそこでするし、君が訊きたいことには出来る限り答える。もちろん嫌なら構わないが……」

それは危険だ、と彼の表情が語っていた。

……ふむ。こうして話している限り、この男性は善人なのだろう。私は幼い頃から愛情などと言うものとは無縁だったが故にか、逆に人の感情には敏感なのだ。

もっとも善人だからと言って無条件で信頼するほど甘くも無い、はずなのだけだ……

「そうですね……では、とりあえず案内して頂けませんか？」

気付くと私はそう返事していた。彼を信じても良いという自分の

直感に、素直に従おうとしていた。

男性は驚いたように私を見る。

「……誘っておいてなんだが、良いのか？」

「ええ。私もここで野宿と言うのは避けたいですから」

答えると、彼は面白そうに笑った。

「それもそうだな。じゃ、ついてきてくれ」

森を抜け、辿り着いたのは一軒の家だった。大きさだけ見れば貴族か何か、とにかく裕福な人間の住む家だろうか。でも、それにしでは装飾が少なすぎる。

そんなことを考えながら、男性の後ろについて中に入る。ホールらしき空間を抜け、他と同じくそれなりに優雅ではあるが装飾の少ない廊下を少し歩いて、案内されたのは食堂らしき部屋だった。

「座ってくれ」

その言葉に無言で頷き、彼が指した部屋に座る。

男性はそのまま部屋の奥にある扉の先……恐らく台所か何かだろう。そこへ入って行く。少しすると彼は戻ってきて、私の向かいに座った。

私の前に、湯気を立てる液体の入ったカップを置いてから。

「入れた後で言うのもなんだが、紅茶で大丈夫か？ ……君のいた世界にあったのかも分からないが」

「ありました。……頂きます」

軽く首肯してカップを取り、口をつける。ふと『温かいな』と思
い
そこで初めて、自分の体が冷え切っていたことに気付いた。

そういえば私は川に落ちたわけで……いえ、正しくは飛び込んだ
のだけれど、何故か服は濡れていなかった。ここが本当に異世界だ
というのならば、恐らく私は水に触れるより前にこちらに飛ばされ
たのだらう。

だけどここの肌寒さからして季節はこちらも同じ初冬らしく、それ
なのにこの世界に来る前、私は薄着になってしまっていたわけで……
寒さとか痛さとか、そういう感覚は意識すると途端に自己主張を
始めるものである。

無言でもう一口飲む私を見て、彼は苦笑。

「その格好じゃ寒そうだからな。……さてと、まずはこの世界のこ
とからか」

彼は近くの棚から一枚の紙を取り出し、テーブルの上に広げる。

恐らくこの世界の地図、だらう。もちろん私の住んでいた世界の
ものとは全く違うそれは、中央に大きな楕円形の大陸が一つ……そ
してそれを囲むように、その半分くらいの大きさの大陸が四つ。更
にその周りに比較的小さな島がいくつもあった。

彼は楕円を囲む四つの大陸のうち、私から見て右下を指差す。

「俺達が今いる国はここ、イグレシア王国。領土はこの大陸と、近
隣の島がいくつかな」

「……平和なのですか？ この国は」
「中央の大きな大陸に比べれば、周りの四国は平和だな。中央大陸は数国家に分かれていて、よく領土争いが起こっているから。この国は今の王が優れているから、普通の人間にとっては特に平和な方だと思っ」

普通の人間にとっては、の部分で彼の顔が僅かに曇る。……つまり彼は普通じゃ無い、とでも言いたいのだろうか。

「『魔法』は？ この世界には存在するのですよね」

「そうだな。基本的に魔法学校や魔法院で習うことが多いが、独学でも覚えられないことは無い。それに一部の人間は、生まれたときから魔法を使える。呼吸をするのと同じ感覚で」

「生まれたときから……？」

「ああ。ここ 『保護施設』 にいるのは、そんな子供達だ」

「……何故『保護』なのですか？」

「迫害されているからさ」

男性が僅かに、哀しげな笑みを浮かべる。

「この世界、特にこの国じゃ、そういう人間……精霊術者と呼ぶんだが、生まれつき精霊術を使える人間を嫌う傾向にあるんだ。今の女王はそれを止めさせようとしているが」

「……昔からの習慣は、そう簡単には抜けないと言っことですね」
「ああ。だから俺はここを作った」

彼が息をつき、天井を見上げる。

「普通の人間ならまだ良い、嫌うだけで終わるから。だが中には本

気で精霊術者を捕らえたり、時には命を奪おうとすらしてくる奴らがいる。ここは……ここだけは、その手から逃れられる場所なんだ」

……それは、一人の人間が頑張ればどうにかなるような問題では無いように思えた。

だけどきつと彼は、一人でそれをしたのだろう。聴いている限り、それに手を貸す人間はきつと少ないのだろうから。

「『精霊術者』と言いましたね。魔法には種類があるのですか？」

「ああ、三種類に分かれている。まず」

彼が説明したところで、唐突に廊下に繋がる扉が開く。

思わず警戒する私と驚いた様子も無く視線を向ける男性の前に現れたのは、小さな……恐らく十歳前後の女の子だった。

軽くウェーブのかかった、セミロングの金髪。緑色の目を眠そうにこすっている。

……一瞬。

どこか、物凄く儂げな印象を受けた。

少し突いただけで崩れてしまいそうな、そんな。

男性が彼女に声をかける。

「どうかしたのか、エディ？」

「……お水」

「そうか。……ほら」

彼はコップに水を注ぎ、その子に手渡す。私は彼女が水を飲むのを見ながら、小さく呟いた。

「……この子が……？」

それが聞こえたのか、彼は軽く首肯する。

「ああ。今『保護施設』にいるのはこの子を含めて三人だ。もともと精霊術者自体が少ないからな。更に生まれたときから精霊に好かれる人間は滅多にいない。それに、生まれても親や周りの大人に殺されてしまう例も少なくない」

悔しさ、苦痛、そんな感情に顔を歪めて……彼が説明する。

私はあえてそこには触れず、別なことを訊ね返した。

「……精霊に好かれる、とは？」

「精霊の王様が、力を貸してくれるんだよ」

予想に反し、私の問いに答えたのは小さな少女の声だった。

視線を下げると案の定、水を飲み終わったらしい少女が私の方を見て、可愛らしい笑顔を浮かべる。

「エディ達はね、『精霊が従いたがる質』の魔力をいっぱい持っているんだって。だから精霊の王様が力を貸してくれて、凄い魔法を使えるんだよ」

「精霊が、従いたがる質……？」

首を傾げる私を見て、男性は苦笑し、少女の頭を撫でる。

「そうだな。よく覚えていたな、エディ」

「えへへー。……ね、お兄ちゃん、この人誰ー？ お客さん？」

「ああ、今夜だけ泊めてほしいらしい」

「そうなんだー。こんばんは！」

「え、ええ……」

深夜にも関わらずテンションの高い少女の挨拶に、私は戸惑い気味に返す。こ、子供って皆こうなの……？

そんな私の気持ちなど知らず、少女と男性は話を続ける。

「それじゃエディ、先に寝てた方が良くないかなー？」

「そうだな。自己紹介は明日で良いだろう」

「うん、分かった。おやすみー！」

「ああ」

男性との会話を終えた少女が出て行って、私はようやく息をつく。それを見て、男性は苦笑。

「それじゃ、さっきの話の続きだな」

「……確か、魔法が三種類に分かれている……というところでしたね」

「ああ。それを話す前に、この世界そのものについて説明しておく必要があるだろうな」

彼はそこまで話すと一度立ち上がり、紅茶を二人分入れなおして再び座る。

「まず、この世界の頂点に立つのは、四種類……風火水土それぞれ『精霊』の王と、何体いるのか確認されていないが『龍』達だと言われている」

「王……ということとは、その下にまだ精霊達がいる、と考えて良いのですか？」

「そうだな。数え切れないほどにいる……というより、物質そのものが精霊だ、と言うべきかな。もっとも、王以外の精霊の力は皆同

じようだが……精霊は全てを構成し、司るもの。自然現象も『魔法』を使うことで起こりうる現象も、全て精霊達が起こしているようなものだ」

ふむ。まあ、『全てを構成し、司る』のだから当然なのだろうか。

「……龍の方は？」

「精霊達が構成した世界の『護り手』たる存在、だな。人々に最も恐れられる、高度な知能と強い力、長い寿命を持つ生物だ。基本的に、強ければ強いほど賢い」

「私がいた世界で伝えられているのと変わりませんね。……で、その話が三種類の魔法とどう関係するのです？」

「ああ……魔法って言うのは、基本的に彼らの力を借りるものなんだ。一般的に『魔法』と呼ばれるのは、たくさんいる精霊達に力を借りること。魔力の消費が少ない代わりに威力も低いものばかりだ。使用者が一番多いことも事実だがな。……と、『魔力』は説明しなくて大丈夫か？」

「ええ」

恐らく私のいた世界と基本的な認識は同じだろう。

そう考えて首肯すると、彼は話を続ける。

「で、精霊の王に力を借りて、精霊達を『従わせる』のが『精霊術』だ。通常の魔法より威力が高いが、精霊を従わせるのに強い意志と魔力が必要。だから、誰でも使えるわけじゃない。故に使用者は少ない。学ぼうとしても挫折する人間が多いからな」

彼のその言葉に、思わず首を傾げる。

「ですが、さっきの子は……」

「そうだな、エディは精霊術者だ。もつとも、ここにいる子供達は皆、精霊術を使うための訓練なんかしたことも無いが」

「さっきの……精霊が従いたがる質の魔力、ですか」

「ああ。普通は精霊を従わせるほどの魔力になるまでに物凄い努力が必要な上、意志が弱いと逆に精霊に喰われてしまうこともあるんだ。だが、生まれつきそういう『精霊が従いたがる質』の高い魔力の持ち主もいて、そういう人間は難なく精霊術を使うことが出来る。ここにいる三人の子供は、そういう魔力の持ち主なんだ。それを持って生まれたが故に、生まれつき精霊術が使える。……迫害されることは、その代償としては重すぎるが」

「……そう、ですね」

生まれてすぐに周りの大人に殺されることも少なくないと言うのだから、確かに重すぎる代償だ。

そうありたい、と望んで生まれてきたわけでもないのに
迫害される子供達の姿を、自分の姿と重ねてしまって……思わず
黙り込む私に、彼が訊ねてくる。

「どうかしたのか？」

「……いえ、何でも」

首を横に振ると、男性は訝しげに首を傾げつつ立ち上がる。

「基本的なことはこれくらいだな。もう遅いし、空いている部屋の
一つに案内するよ」

「ええ」

頷き、彼の後について部屋を出る。廊下を歩きながら……ふと、
聞き忘れていたことに気付いた。

「そういえば」

「何だ？」

振り返る彼に向かって、問う。

「貴方、名前は何と申すのですか？ 一日だけとは言え、互いの名前も分からないのでは不便でしょう」

「それもそうだな……俺はアレス。アレス＝クライディアートだ。君は……」

「東宮エレナ。苗字はついさつき捨てたので、名前で呼んでいただけるとありがたいですね」

「じゃあそうさせて貰おう。短い間だがよろしくな、エレナ」
「……ええ」

曖昧に頷く。

こつこつと純粋な善意を向けられるのは本当に久しぶりで、慣れていなくて……

どう反応すれば良いのか、分からなかったから。

「お姉ちゃん、起きて起きてっ！」

「ん……」

そんな少女の声に、薄っすら目を開ける。

そこに光が飛び込んできて、私はここがあの暗い自室では無かったことを思い出した。

「……向こうで言っと、朝の七時くらいでしょうっか」

窓から見える太陽の上がり具合を見て、そう判断する。

……私にしては物凄く遅い起床時間だ。夜明け頃には目覚める、というのが体に刻み込まれているのに。自分では気付かなかっただけで、結構疲れていたのだろうか。知らない場所とは思えないくらいにぐっすり眠れたのだけれど、起床はとて賑やかだな、と。そんなことを思いつつベッドを降りて。

……再び実感する。私は、東宮から逃げ出せたのだと。あの、縛られた孤独な世界から逃げ出せたのだと。

「どしたの、お姉ちゃん？ まだ眠いー？」

少女が私の目を覗き込み、首を傾げる。

……確か、エディだったか。昨日そう呼ばれていた少女である。そういえばこの子の部屋は隣だと言っていた。

彼女は昨日と違い私服らしき服装。らしき、というのはこの世界の基準がよく分からないからだ。あまり私のいた世界と変わりは無いみたいだけど……昨日の夜に見た限り、防寒着の類はもっと異世界らしいというか、向こうには無いようなデザインのものだったし。昨日は下ろしてあった金髪は、今日は二つに結んでいた。

とりあえず私は彼女の問いに答える。

「いいえ、平気よ。エディ、だったかしら」

笑みこそ浮かべられないが、自然に口調は砕けたものになっていた。子供に敬語を使うのもどうか、と思ったからだけど……こんな口調は数年ぶりだ。

少女は笑顔で首肯。

「うん、エディ……エディフェル＝トリエルトって言うの。もう少

しで九歳！」

訊いてもいないのに自己紹介する少女。エディというのは愛称だったのか、とぼんやり思う。

……初めて見たとき、脆そうに見えたのは気のせいかな。見ていると年相応の元気な女の子にしか見えない。いや、子供と接したことなんて無いから、『年相応』なのかは分からないけど……

「ねえ、お姉ちゃんは何て言うの？」

「あ……エレナよ」

「ふうん、名前も綺麗！」

エディの笑顔を見て、私は戸惑う。

その言葉は純粹な褒め言葉で、今までそういう言葉と同時に向けられた悪意や下心の類は一切無くて……だからこそどう返せばいいのか分からなかったから、思わず話を逸らしてしまう。

「そ、それでどうしたの、エディ？ アレスに起こしてこいって言われた？」

「ううん、お兄ちゃんは疲れているだろうから起こさない方が良く、って言ってたの。でも、エディは早くお話してみたかったから」

「話してみたかったって……私と？」

「うん！ お姉ちゃん綺麗だし……それに、お兄ちゃんから聞いたの。お姉ちゃんは『異世界』から来たって……どんなところなのかな、って思って」

「……っ」

その言葉に思わず表情を硬くする私に、エディは心配そうな表情で訊ねてくる。

「えつと……お姉ちゃん？ あの……訊いちや駄目、だった？」

その心底不安げな表情に、私はゆっくりと首を横に振る。

「……いいえ。でも、出来れば訊かないで欲しいわね。私は、あの世界から逃げてきたのよ」

「逃げてきた……？」

「そう。私は貴女が思うような、綺麗な人間じゃないわ。外見も、心も」

私の言葉に、エディは少しの間考え込み……

そして、笑顔で顔を上げた。

「ううん、それでもお姉ちゃんは綺麗だよ。お兄ちゃんが前に言っていたよ、『逃げられることも強さだ』って。それに、エディはお姉ちゃんが逃げてきてくれて良かったって思うよ！」

「え……？」

「だって、そうしなきゃエディ、お姉ちゃんと会えなかったもん！」
「っ」

思わず目を見開く。

……まただ。純粹な善意。

だけど、今度は戸惑うだけじゃなくて

「……ありがとう、エディ」

私の言葉に少女は驚いた表情を浮かべ、それはすぐに満面の笑みへと変わった。

「それじゃ、エディ先に食堂に行ってるね！ 場所、分かるよね？」
「ええ。すぐ行く、って伝えておいてくれるかしら」
「うん！」

エディはドアの方へと走っていき……笑顔で振り返る。

「あのね！ エレナお姉ちゃん、笑った顔は物凄く綺麗だったよ！」
「っ!?!？」

私がおか言う暇も無く、エディは部屋を出て行く。
ぱたぱたと、遠ざかる足音。

……気付いた。エディに礼を言ったときの私は、確かに微笑んでいたことに。

少しずつ、笑うことに抵抗がなくなっている私に。

第一章 始まりの場所に・前編（後書き）

そんなわけで、だいぶ間が空いてしまいましたが、世界観説明をして主要キャラの半分が出てきたところで第一章の前編は終了です。後編で残りの半分のキャラが明らかになったり、少し話が進んだりすると思います。

……『思います』なのはまだ後編も半分しか書いていないから。後編は恐らく前編より長くなると思いますが、お付き合い頂けると幸いです。

そうそう、プロローグしか投稿していないのに評価やお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。もう少し更新ペーすが上がるよう頑張ります……感想頂けると飛び上がって喜びます。

では、次は後編でお会い出来ますよう。

第一章 始まりの場所に・後編

制服のまま寝ていたから、やることと言ってもせいぜい服の皺を伸ばして、髪を整えて、顔を洗って……それくらいである。洗面所の場所は昨日教えられたから問題は無し。この世界にも水道とかそういう設備はあるらしい。

一通り終えて食堂に入ると、ちょうどこちらを向いたアレスと目が合った。

「良く眠れたか？」

「……ええ、まあ」

微笑んでくるアレスの問いに首肯し、促されるまま空いている椅子に座る。と同時に、一人の少年が立ち上がった。

エディよりは年上だろうか。紫がかかった銀髪に、深い紫眼。賢そうな、それでもまだまだ子供っぽさの残る子だった。

「どうした？ テオ」

アレスの問いに、テオと呼ばれた少年は警戒するように私の方をちらりと見て、そしてアレスに視線を戻す。

「オレはもう食い終わったし、外行ってくる。……行くぞカイル」

その言葉に、彼の隣に座っていた明るい茶髪に茶色の瞳の小さな少年が慌てて立ち上がり、彼の後を追う。何か言っているみたいだけど、声が小さいのか私には聞こえない。

……ふむ、それでも感覚は普通の人の何倍も良いはずなのだけ。

「良いんだよ別に！　じゃ、昼までには戻るから」

しかしテオにはその声は聞こえたらしく……怒鳴るように答えて二人は部屋を出て行く。

呆然とする私と、嘆息するアレス。エディが呆れたように呟く。

「もー、二人とも子供なんだから……エレナお姉ちゃんは大丈夫だと思っのに、全然分かってないんだもん」

その言葉の意味も気になるけど、その前に。

「……それで、あの二人は？　恐らくここにいる三人のうちの、残りの二人ですよ」

訊ねると、アレスは首肯。

「ああ。大きい方がテオ……テオドル＝レイゼンファ。十二歳だから、子供達の中では一番年上だな。俺とも一番長い付き合いだ。で、小さい方はカイル＝カルアデイス。五歳。テオと一緒に遊んでいることが多い」

「……男の子ばかりなんだもん、エディが女の子らしくないのしょうがないんだよ」

エディの呟きに、思わず苦笑する。

確かにその環境じゃ『女の子らしさ』に触れる機会は無いかもしれない。そういえば『エディ』と言うのは、私のいた世界じゃ主に男性の名前として使われるものではなかったか。まあ、この世界では違うのかもしれないし、そもそもエディと言うのは愛称だとさっきはつきりしたのだけだ。

だけど、私はエディに微笑みかける。

「それでも無いと思つわよ?」
「ほんと!?!」

目を輝かせるエディと対照的に、アレスは驚いたような顔で私を見る。

「何ですか」

「いや……そんな顔も出来たのか」

その言葉で私はまた自分が笑っていたことに気付いた……けど、それを素直に認めるのは恥ずかしいので言い返してみる。

「……失礼ですネ」

「すまない。自分でもそう思った」

彼は素直に謝る。……こういうところが、私にはとても眩しく思えるのだけ。

「じゃ、エディも外行つて来るねー!」

「ああ、気をつけるよ」

部屋を出て行くエディを見送つて、そして私に向き直るアレス。

「さて……これからどうするか、なんだが。昨日君がいた森を抜けると、割と大きな街があるんだ。今日の午後は買出しに行くつもりだから、そのついでに君を送ろうと思う。働き手を必要としている店が多いから、追い出されることは無いだろう。王都と違って人も優しいからな」

「王都と違って、というのが気になりますね」

眩くと、アレスは苦い顔をする。

「……王都には、『軍』がいるからな」

「『軍』？」

その単語に首を傾げると、彼は一度だけ嘆息し、私を見た。

「ああ……そうだな、とりあえず昨日の続きでも説明しておくか。
この国……イグレスシアには、二種類の軍事組織があるんだ。一つは
王立騎士団。国王の名の下に編成された、ちゃんとした組織だ。こ
っちは信用して良い」

そこで一旦言葉を切るアレス。私が黙って続きを促すと、彼は軽く首肯して続ける。

「問題はもう片方、『軍』の方だ。正式な名称は知らないが、やっていることは嫌と言うほどよく知っている。簡単に説明すると、生まれつきの精霊術者の迫害だ」

「つまり、貴方達の敵……ということですか」

「……そういうことになるだろうな」

答える彼の声は、どことなく疲れたかのようで……それと同時に、氷の如く冷たい何かも含んでいて。

一瞬だけ彼の目に浮かんだ、とても強い憎しみの色。後悔、悲しみ。

他人である私にすら分かるその感情に、何かあったんだろうな、と考えて……

だけどそのことを訊ねる前に、彼は話を続ける。

「実際、奴らは何度かここに来たことがある。精霊術者を保護するなど言語道断、この世の理に反している、さっさと子供達を引き渡せ……そんな感じだな」

「……………よく断れましたね」

「奴らもせいぜい警告程度だったみたいだからな。それと、ちよつと脅した」

「脅した、ですか」

表情一つ変えずにとんでもないことを言われた気がする。

だって話を聞いていると『軍』というのは嫌な奴らだけどそれに強い組織のようで、当然それなりの権力とか発言力も持っているはずで。

それを脅したと、彼は言っているのだ。

どうやって？ と訊ねたいのを堪える。

訊ねても、恐らく答えてはくれないのだろうし……………それにどうせ、後数時間で彼らとは別れることになるのだ。

どうしようかは決めていないけど、とにかく街に行って仕事を見つけて、普通の暮らしを。街に来た彼らに会うこともたまにはあるかもしれないが、所詮顔見知りの域。深く踏み込む必要は、無い。

そのはずなのに。

知りたい、と思ってしまう私がいる。

……………何だろう。信用した、わけでは無いのだろう。

なのに彼らの 彼の、アレスの近くにいたいと、そう思っってしまう。力になりたいと。

その気持ちには名前がついているのだろう。だけど私には、分からない。

いや、何となく分かるのだけど、確信が持てなかった。

今まで一度も抱いたことの無い、触れたことすら無い『想い』だから。

「っと、話が逸れたな。とにかく王都には、騎士達のような根っからの善人もいるが、同時に『軍』の奴らもいるんだ。だから、あまり平和とは言えない。少なくとも俺達にとっては、な」

「……そうでしょうね」

鉢合わせでもしたら、どうなることやら。

ああ、だから彼らはこんなところにいるのか。街から歩いて一時間以上かかるような、森に囲まれたところに。予想が正しければここは国の中でも辺境だと考えて良いだろう。人が来ない場所であればそれだけ来るのが不便にもなるし、そうなれば『軍』とやらが来る回数も自ずと減っていくだろうから。

「ここから一番近い街の人間は、精霊術者……エディ達の存在を容認しているのですか？」

「ああ。食料やら、そういう生活に必要なものを手に入れるにはあの街に行くしかないだろう？ 最初は反発する人間もいたが、今は殆どいない」

人も優しい、とさつき言っていたから、それは思い込みなどではなく、本当に街の人間と打ち解けたということなのだろう。

無意識に、そんなことを考えている自分に気付く。
彼らを理解しようとしている自分に、気付く。

……さつさと決断してしまうべきかとも思うけど、決断には後押しが必要で。

「一つ提案なのですが、アレス」

「何だ？」

「いえ、今の話とは関係の無いことなのですが、泊めてもらった礼がまだでしたから……街に行くのは昼食を終えてから、ですよな」
「……そうなるな」

訝しげに首肯するアレス。

「でしたら、私に作らせてもらえませんか？ 昼食」

「いや……流石にそこまでさせるわけには」

「そこまでも何も、私からは何も返していませんよ。借りは作りたくありませんから。……味は保証しますよ、料理は得意ですから」

そんな私の言葉に。

少し考え込んで、彼は頷いた。

「それもそうだな。じゃあ、任せて良いか？」

「最初からそう言っているでしょう」

僅かに微笑みながら、私は答える。

「……これでタイムリミットは決まったぞ、と自分に言い聞かせながら。」

とは言えまだ昼まではだいぶ時間があるわけで、どうしようかと迷った私にアレスが『この子供達と話してみたらどうだ？』と提案してきた。

まあ他にやることも無いしと、外に出てみたのは良いけれど。

「……話す以前に、そもそも見つけることが難しいですね……」

無駄に広い庭を歩きながら、そつと嘆息する。ちなみにアレス曰く、一応この施設の敷地は柵で囲まれている範囲なだけねど、子供達には森の入り口辺りまでなら行くことを許可しているらしい。この辺りに人が来ることはあまり無いからと。

まあ、そもそも柵の中でもかなりの広さがあるから、まずはそこを探すべきなのだけど。

と、木の下で金髪が揺れているのが視界に移る。エディかと思つて近付いてみると、予想通り。

「エディ？」

「あ、エレナお姉ちゃん！ どうしたの？」

笑顔で私を見上げる少女の手には、本。

「……読書？」

何となく、この子には似合わないな、と思つて首を傾げると、エディは首肯して読んでいた本を見せてくる……けれど。

「文字は私のいた世界とは違うみたいね……ごめんなさい、読めないわ」

「言葉は通じるのに？」

「ええ、そうみたい」

「そつかあ……これねー、お料理の本なの。いつもお兄ちゃんのお手伝いするんだけど、分かんないこともあるから……だから、お勉強！」

「偉いのね」

エディの言葉に頷きつつ、思いつく。

「そうだエディ、じゃあ後でちょっと手伝ってくれないかしら？」

「ふえ？ 何を？」

「料理よ。今日の昼食、私が作ることになったから」

「本当！？」

エディの目が輝く。

「本当よ。それで、エディにも手伝って欲しいの。駄目？」

「ううん、手伝いたい！……でも、良いの？」

「ええ、大歓迎よ」

頷くと、エディの顔に笑みが広がる。……見てみるとちょっと落ち着いたりして、段々と影響されているなあ……などと少し思っ

「あ、そうだエディ。後の二人、どこにいるか知らないかしら」

「後の二人って、テオとカイル？ えーっとね、カイルは川の近くじゃないかなあ？ テオは多分、カイルが知ってると思う！……

一緒に行く？」

「良いの？」

「うん！ だっってお料理はお姉ちゃんが教えてくれるんでしょ？」

なるほどそれもそうか、と私は頷き、立ち上がったエディの後についていく。

歩きながら、彼女は私の方を見て訊ねてきた。

「でも、テオ達に何の用なのー？」

「用ってほどじゃないのだけど……少し、話してみたくて」

「そっか……あのね、エレナお姉ちゃん」

エディは納得したように頷いた後、さっきまでとは打って変わった真剣な表情で私を見上げる。

「テオが何言っても、カイルが何しても、あまり怒らないでね。多分、怖いだけだと思うの。二人とも、子供だから」

まるで自分はそうでは無いかのように言ってくるエディ。

「怖い……？ エディは、怖くないの？」

「そんなことない」

首を横に振る彼女の表情が、微妙に変化する。

「わたしだって、こわいよ」

それはこの子を初めて見たときと同じ……

儂げな、少し突いただけで崩れてしまいそうな、そんな表情。

一人称すら変わるそれは、恐らく彼女が普段隠している本心なのだろう。

エディはすぐにその表情を隠し、明るい笑みを浮かべる。

「でもね、怖がっていたら何にも変わらないから！ だから、エディはお姉ちゃんのこと信じてみることにしたんだ！」

信じてみる。

その言葉が、心の中で反響する。

……その言葉の意味を、私は知らない。信じるとは何なのか、どうすれば人を信じられるのか、分からない。忘れてしまった。

「ただ、この子は強いと思う。」

「わざわざこんなことを言っただけ……きっと過去に、人を信じてるのが怖くなるような『何か』があったのだらう。それは当然な人もかもしれない。だってこの子は『精霊術者』の一人で、この世界の人間には迫害されてしまう立場らしいから。」

「それでもこの子は、笑顔なのだ。」

「簡単に笑うことを忘れた私には眩しく思えるくらいに、この子は前向きなのだ。」

「凄いのね、エディは」

「ふえ？」

「眩いた言葉は聞こえていなかったようで、だけどエディは笑顔で私を見上げる。」

「答えようとすると、エディが前の方に視線を移した。いつの間にか森に入っていたようで、つられて見ると視界に入るのはたくさん木々と流れる川と、」

「……カイルかしら？」

「うん、発見ー！」

「川辺に座ってぼんやりと宙を眺める、幼い茶髪の少年だった。」

「エディの声が聞こえたのか、彼は振り返り……エディの隣にいる私を見て、怯えた表情を浮かべる。」

「」

「駆け寄ってきて、エディに何かを訊ねるカイル。声が聞こえないことに首を傾げると、エディが説明してくれる。」

「カイルはね、喋れないんだよー。普段は精霊の力を借りているの。カイルが信用している人にだけ、精霊が『声』を届けてくれるんだつて。まあ、それはカイルの本当の声じゃないんだけど……」
「そう、それで聞こえなかったのね……つまり私は信用されていない、ってことかしら」
「……多分」

エディは控えめに頷いて、カイルの方を見る。

「でもねー、カイル。エレナお姉ちゃんは良い人だよ？」

正直自分がそれほど良い人間だとは思わないのだけど、まあそこは流しておくとして……私はまた聞こえない『声』で返答するカイルの、その口元を見つめる。

「」

「そうね、それは私も同感だわ」

「ふへっ!?!」

私が答えるのを聞いて驚くエディ、カイルも驚きの表情を浮かべている。

「……まあ、ある意味予想通りの反応でもあるか。」

「お、お姉ちゃん……カイルの言ったこと、分かるの!?!」

「え? ええ……』どうして良い人だって言えるの?』でしょう。違うかしら?」

「うっん、合ってる……どうして? 何で分かったの?」

「読唇術、よ。唇の動きを読んだの」

向こうの世界で 東宮で叩き込まれた技術の一つである。使い

たくないと思っていたのだけど……こういう形で使うのなら、悪くない。

呆然としているカイルに、私は続ける。

「それでね、カイル。私も同感よ。会ったばかりの人間を『良い人』だつて断定する材料なんて無いし、むしろ私なんかを良い人扱いするエディの方が異端だわ」

「ふえ、お姉ちゃんそれは酷」

言いかけるエディに、そして黙って私を見ているカイルに向けて。そつと、問いかけるように。

「だけどね、私は貴方達と仲良くなりたい。貴方達の言う『良い人』でありたい。貴方達に信じてほしいし、信じたいの。……駄目かしら?」

二人の反応は、全く逆のものだった。

顔を上げて嬉しそうに笑顔を返してくるエディと、俯いて何も答えてこないカイル。しばらくしてカイルも顔を上げ

「駄目じゃないよ。ぼくも、信じたい」

聞こえた『声』に彼の方を見ると……カイルの表情は、笑顔だった。

「ところで、カイルはあそこで何をしていたの?」

カイル曰く森の奥の方にいるらしいテオを探しながら、私はそう

問いかける。ちなみにこの数分でこの子とも打ち解けられたようで、カイルも私に普通に受け答えしてくれるようになった。

とは言えこの『声』は彼の本当の声では無いらしいのだけだ。

「えつとね……精霊と、お話」

「精霊と？ ……確か精霊は『全てを構成し、司るもの』だったかしら」

「うん！ カイルはね、精霊と仲が良いんだよ。エディもテオも精霊と話は出来るけど、ちゃんと仲良しなのはカイルだけ！」

「……全部じゃ、無いよ。水の精霊の、ほんのちよつとだけ」

恥ずかしそうに言うけれど、それは相当凄いことなのではないだろうか。これも彼が精霊術者であるが故なのか。

「つまり、カイルのその『声』を作っているのは水の精霊なのかしら？」

問うと、カイルはこくりと首肯。

「うん……他の精霊だと、あまり上手くいかない……から」「そうなの？」

適性というか、属性のようなものだろうか。向こうの世界の小説なんかには良くある、『こつこつ系統の魔法は得意で』『みたいな……』そういえば精霊も四種類いると聞いていたし、自分に合うものと合わないものがあるのは当然だろう。

……と、不意にカイルが立ち止まる。

「……どうしたの？」

「……いた」

彼の視線を追って上を向くと、木の上で何かが光った。いや、考えるまでも無いか。光ったのは銀色の髪。つまり……

「面白いところにいるのね、テオ？　だけど私は貴方と話したいの、ちょっと下りてきてくれないかしら？」

「……家族以外の奴が、テオって呼ぶな」

私を睨みつつ、案外あっさり降りてきてくれるテオ。座っていた枝から飛び降り、鮮やかに着地する。……異常な身体能力も精霊術者であるが故だとしたら、ちよつとずるいかもしれない。

彼はどうやら私に愛称で呼ばれるのは嫌らしい。まあ、気持ちは分からなくも無いかもしれないので気にせず今は希望通りちゃんと名前で呼ぶことにする。ええと……

「テオドール、だったかしら？」

訊ねるも、返事はない。まあ否定してこないってことは、これの良いのでしょうけど……代わりに彼は私の背後、エディとカイルに視線を向ける。

「何だよ……エディもカイルも、結局そっちの味方だよ」

「あのねーテオ、お姉ちゃんの良い人だよ？　エディはテオと違って子供じゃないから、お姉ちゃんのこと信じることにしたの！」

「子供はエディだろ、オレより三つ下のくせに……で、カイルは何だよ」

「……お姉ちゃん、分かってくれた。ぼくの、ことば」

「は？　ことばって、カイルの『声』かよ？　カイルから心を開いたわけじゃないよな？」

「う、ん……それでも、分かってくれた、から」

「……それが事実だとして、お前それだけで信じたのかよ。信じられるかどうか、それだけで判断して良いのかよ」

やはりこの子達に共通しているのはここか、と……当事者でありながら三人のやり取りを傍観していた私は、その事実にくと気付いた。

即ち、相手が信じられる人間なのか否か。それをこの子達は、必死で確かめようとしているのだ。

……そういう意味では、私と似ている。

「テオこそ、分からないの？ お姉ちゃんは『軍』の人達とは違うよ。だからエディもカイルも、お姉ちゃんを信じるんだよ。テオにはそれが分からないの？」

『軍』。

昨日聞いた……この子達を脅かす存在。

その名が出た途端にテオはびくりと肩を震わせ、それでもエディを睨みつけて言い返す。

「あいつらじゃなくても、オレ達のこと嫌ってる奴は大勢いるだろ！ エディもカイルも、精霊術者のこと知ってる人間に……アレス兄以外の人間に、ちゃんと人として認められたことあるのかよ！」

悲痛な叫び声。

それはつまり、彼らがアレス以外の人間には酷い扱いを受けていたことを……人として扱われないことを告げていて。

テオの言葉は、それでも『認めてほしい』と訴えかけてきていて。

「……っ！？」

気付くと私は、テオを抱きしめていた。驚いたように黙り込み、それでも私から無理やり離れようとはしない彼の体は、確かに震えていて。

……やっぱり、同じなのだ。この子達は。
寄り代を失い、一歩先も見えずに震えていた、小さな頃の私と。
心を閉じることしか出来なかった、幼い頃の私と。

だから……

「信じる、なんて言わないわ」

貴方達のその気持ちは、よく分かるから。

「それでも、貴方達に信じてほしいの。貴方達を信じたいの」

カイルに言ったのと同じ言葉を、繰り返す。

せめてこの子達の前では、『良い人』でありたいと……そんな初めての願いを、そつと心の中で呟いて。

やがてテオは、小さな声で言う。

「………異世界から来たって、アレス兄に聞いた」

「ええ」

「魔法とか精霊とか、そういうこと全然知らないって」

「そうね、知らないわ」

「怖がらないって、約束出来るのかよ。オレ達のこと……精霊術のこととか、知っても。精霊術を見ても。……大の大人だって、逃げ出すような力なのに」

「約束出来るわ。そんな力、慣れっこだもの」

テオの顔を見て、微笑む。まだ慣れない、ぎこちない笑顔。それ

でも効果はあつたらしく、彼はしばらく硬直し……
不意に私の腕から抜け出し、森の更に奥へ駆けていこうとする。
……駄目だった、かしら。

「テオドル？」

「テオで良い」

こちらに背を向けたままの、短い言葉。

だけどそれは、彼もまた私を認めてくれたという、信じてくれた
という証でもあつた。

「……テオ。何処へ行くの、もうすぐお昼よ？」

「エレナ姉が作るのか!？」

驚いたようにこちらを振り返るテオに対し、頷いてみせる。

「ええ。エディにも手伝ってもらうけれど」

「そっか……あ、昼食出来る頃にはちゃんと戻るから、三人とも先
に戻っててくれ」

「良いけど、何するのー？ テオ」

それまで黙って私達のやり取りを見ていたエディが横から口を挟
んでくる。

「決まってるんだろ、いつもの魔法の練習！」

「……ずる、い」

羨むようなカイルの声に、テオは苦笑。……その表情にはさつき
までのような不安や警戒は無く、だけど大人びていて。

「カイルもアレス兄に教わってんじゃん」

「でも……テオみたいに上手く、出来ない、から」

「それは単に練習と、後は年齢の問題だろ。大きくなれば出来るようになるっつもの。それより早くしないと昼、間に合わないんじゃないの？」

「そうね、テオの言う通りだね。行きましよう」

エディとカイルがついてくることを確認して、来た道を辿る。

「行く当て、か……決まっちゃいましたね、この世界でやりたいことが」

歩きながら。隣を歩く二人に聞こえないよう、そっと呟く。

彼らの優しさに甘えてしまうようだけど、それならそれ以上の気持ち返せば良いと。

そんなことを考えるまでに、この短期間で子供達は私の心を溶かしていたのだった。

……だから。

正直に言ってしまったえば、エレナの料理の腕は予想以上だった。俺の何倍も上手い……どころか、もうこれで商売が出来るレベル。それも、例え王都で店を始めたとしても間違いなく繁盛するであろうレベルだ。

「エレナ……どこで身に付けたんだ？　こんな技術」

「言っていないんですけどか？　向こうの世界での生活が生活なので

……っついうことに割く時間が、自然と多くなっていたのですよ。

……っつら、テオ。一口くらい食べなさい」

「えー、オレこれ嫌いなんだよ……あれ？ 美味しい」

避けようとしていた野菜を文句を言いつつ頬張り、テオは目を丸くする。

「味付け次第でいくらでも変わるのよ。……どこの世界でも、子供が好む味付けは変わらないみたいね」

そんなテオを見て、エレナはくすりと笑みを零す。僅かではあるが……面白そうな、純粋な笑顔。

こんな顔も出来たのかと、彼女と出会って何回目かの驚きを抱く。昨日、出会った直後の彼女は、何かに怯えるような硬い顔で、常に周囲を警戒していた。それがたった一日……違うな。半日程度で、更に警戒心の強いこの子供達と打ち解けてしまった。

……いや。むしろ、だからこそ打ち解けられたのだろうか？

「お兄ちゃん？ どうしたのー？」

「っ……ああ、エディか」

義妹に声をかけられ、我に返る。

「何でも無い、ちょっと考え事をしていただけだ」

「そーなの？ あのね、お姉ちゃん凄いなだよ！ エディとカイル、隣でお手伝いしていたんだけど」

エディの話に相槌を打ちつつ……ふと思う。

ならば、彼女が エレナを選ぶ道は、俺が考えていることと同じじゃないだろうか？ と。

実際その予感は、見事に当たったのだった。

全員昼食を終え……食器の類も片付け終えた食堂で、俺はエレナと向かい合って座っていた。昨日、正しくは今日の夜と同じ位置である。

子供達は全員自室にいる。昼には出かける、と言っているのその準備だろう。故に、今なら聴かれることも無く本音を言えるのだと、彼女も気付いているはずなのだが……

「……良い子達、ですね」

長い長い沈黙を挟んで……俯いたままではあるが、ようやくポツリと呟くエレナ。それに対し、俺は笑みで返す。

「随分打ち解けていたじゃないか」

「そうですね。……少し、話があるのですが」

「何だ？」

訊ね返すと、ここに来てようやく彼女は顔を上げた。

彼女の黒い瞳が、真っ直ぐに俺を見つめる。

「単刀直入に言いますね。……ここに置いてもらうことは出来ませんか？」

「……何故？」

短く訊ね返すと、彼女は俺を見たまま。

「私は……本当ならこれから街に行つて、そこで暮らすのだと、もう貴方達とは殆ど関わらないだろうと、そう思っていたのですが」

「ああ」

頷き、続きを促す。

「ですが……あの子達は、放っておけない」

僅かに。本当にごく僅かに、彼女の瞳が揺れる。

「同じなんです、あの子達は。小さい頃の私と。……私は駄目だったけれど、そこから抜け出すことは出来なかったけれど。あの子達は、まだ救える。……助けたいんです。それはアレス、貴方だって同じなのでしょう？ だから、ここを作ったのでしょうか？」

俺は無言で首肯。それを確認し、彼女は言葉を紡ぐ。

「なら、私は貴方を手伝いたい。貴方がしたことを、知ってしまいましたから……貴方だけに押し付けておくんなんて、出来ないんです。したくないんです。だから」

エレナはそこで言葉を切る。が、どう続けたかったのかは分かった。

だから俺は少し間を置いて、呟くように答える。

「……一つだけ、条件がある」

「条件、ですか？」

彼女の瞳に、僅かに警戒の色が戻る。それを見て、俺は苦笑。

「そんなに警戒しなくても、大したことじゃないさ。……ずっと敬語じゃ、疲れないか？」

俺の問いを聴き、彼女は警戒を解く。が、その身が僅かに強張るのが、テーブル越しでも分かった。

「……お、恐らく私の方が年下ですし」

「君のいた世界では違うのかも लेकिन、この世界じゃ年齢なんて関係無いことも多いぞ。そもそも一緒に暮らしていくのに敬語じゃ他人行儀じゃないか？ ちなみに俺は後二、三ヶ月で十九だが」「私はもうすぐ十七ですから、やはり私の方が年下ですね……って、そんなことじゃなくて。それは、そうなんです……」

エレナは迷うように俯いた後、何かを決心したかのように再び顔を上げた。

「えっと、その……私も、向こうの世界での生まれが割と特殊でした。物心付いたときから殆どの人間に対して敬語を使ってきたせいで、『普通の話し方』というのがよく分からなくて。自分より年下の子供ならまだ良いのですが、同世代とか年上は……特にここ数年は、本当に敬語しか使っていませんでしたから」

……まず驚いた。想像以上に過酷らしい、彼女にとっての向こうの世界に。

だが俺は、エレナに向かって微笑む。

「じゃ、それも含めて変えていけば良いだろう」

「え？」

「話を聴いていて、君が前の世界に帰るのが嫌なことは分かった。そう考えてしまうような環境にいたことも」

「まあ、それは否定しませんが……それとこの話に、一体何の関係が？」

「あくまでも俺にとって、だが。君のその敬語や他人行儀な態度は、

君がそんな環境から自分を護るために作った『壁』に思えるんだ。こっちの世界では、そんなものが無くても……本来のエレナでいても、大丈夫なんじゃないか？」

「本来の……私？」

「ああ。君を苦しめたものは、この世界には無いんだ。君のいた世界とは違う、向こうじゃ許されなかった君でいても、誰も叱らない」
「っ」

俯くエレナ。だけどその表情は、どこか穏やかに。

「……ああ……そうですね。私は、あの場所から逃げてきたんだから……それなのに、今までと同じ私じゃ、きつと周りの環境も変わらない。別な世界であっても、同じ道を辿るだけになりそうですね」
「……」

呟いて、エレナは顔を上げ、ふっと微笑んだ。

「そう……そうね。よろしく、アレス」

そんな彼女に、俺もまた笑みを返した。

「ああ。よろしく、エレナ」

こうして……俺は、出会ったのだった。

後に最愛の女性むすめとなる……保護施設を、俺達を取り巻く事情の全てを良い方向へ持っていく、一人の少女に。

第一章 始まりの場所に・後編（後書き）

予想通りというべきか、やっぱり前編よりだいぶ長くなってしまったんだぜ……！

さて、そんなわけで、四ヶ月ほど間が開いてしまいましたが第一章はこれにて完結です。少しずつ本来（第二章以降）の雰囲気に近い

いつている感じ？

第二章以降は今以上にほのぼのした雰囲気とたまにシリアスな展開をお楽しみ頂けるんじゃないかなー、と思います。

プロローグ・第一章の前編しかアップされていない状態でもお気に入りや評価を下さった皆様。大変お待たせしました。

第二章の開始までにはまただいぶ間が開いてしまうかもしれませんが、見捨てず呼んでいただけると作者が踊り狂います。

では、第二章でお会いできることを祈って。

幕間1 暇を持て余した少女の企み

「つまんなーい！」

こんにちは、エディフェルトリエルトです。……あれ、エディ誰に挨拶してるんだろ？ ま、いつか。

エレナお姉ちゃんがエディ達と一緒に住み始めて、一週間ほど経ちました。最初はテオもカイルもまだちよつと警戒が残っていたのかギクシヤクした感じだったんだけど、そこはお姉ちゃんの優しさとか……後は大人なエディが間に入りまくってあげたこともあって今は二人ともすっかりお姉ちゃんと仲良しです。流石エディ！

さて、十一月に入って十日くらい経っていたのでだいぶ寒くなってきたものの、外は快晴です。だからテオは勉強が終わったらカイルを連れて遊びに行っちゃったのです。一人残されたエディは暇なのです。

「……だったらテオやカイルと一緒に遊んでくれば良いんじゃないか？」

机に向かって何やら色々と書いているお兄ちゃんがそんなことを言ってきます。

あ、ちなみにここお兄ちゃんの部屋ね。あまりに暇だったので遊びに来たのです。でもお兄ちゃんは忙しそうだったので流石に物理的に邪魔するわけにもいかないし……。お兄ちゃんのお仕事、かな？ それを手伝おうにも、難しくてよく分からない文字ばかり小さくびっしりと並んでいてわけが分かりません。やる気が起きません。精霊術者は普通の人の何倍も優れているって何かで読んだけど、それでもエディまだ八歳だもん。あと一ヶ月くらいで九歳だけど。

「もー、分かってないなあ。エディだって一応女の子なんだよ？
そんな毎日毎日外で遊んでられないよー！」
「たまに外に出るとこれでもかというほど暴れてくる人間が言うことじゃないがな」

お兄ちゃんが嘆息。……げ、元気があり余ってる年頃だから！
だから仕方ないんだよ、うん。

「そだー、それで思い出したけど、お姉ちゃんは？」

「……エレナか？」

「うん！」

こくりと頷いてみせます。女の子らしいといえばエレナお姉ちゃん！
優しいし綺麗だし料理とか上手だし、エディの憧れで目標なのです。
うん、お姉ちゃんのお話聞いているだけでも楽しいもん、決まりだね。

だけとお兄ちゃんは、どこか寂しそうな笑顔で答えます。

「確か地下の書庫にいたって言ったな。……どうも俺と二人だと
まだ居心地が悪いらしい」

「う、そんなこと無いと思うけど」

そう、打ち解けたのはあくまでもエディやテオ、カイル 言う
てしまえば『子供組』とお姉ちゃんだけなわけで。

お兄ちゃんとお姉ちゃんは、まだ微妙にギクシャクしたままなのです。

エディ達が一緒にいる時は普通に見えるんだけど、二人になると
緊張か遠慮か、一気に会話が無くなります。エディ達に関する
ことは盛り上がるくせに、その話題が一段落しちゃうと沈黙……仲が

悪いわけじゃないと思うんだけどなあ。

「……まあ良いや、地下の書庫だよなー？ 行ってくる」
「ああ」

頷くお兄ちゃんを背に、エディは地下に向かいました。

「お姉ちゃん、いるー？」

「あら、エディ？」

あっさり発見。

保護施設 エディが今いるこのお屋敷の地下はまるまる書庫になっっているんだけど、お姉ちゃんは入ってすぐのところにあるテールブルに何やらたくさん本を広げていました。

「えと、もしかしてお姉ちゃん読書中だった？」

「いいえ、どちらかと言うと勉強中ね……大丈夫よ、大体終わったから。それで、どうしたの？」

「あっ、ううん、大したことじゃないんだけど。ちょっと、退屈だったから」

「テオやカイルは？ 外に遊びに行っただでしょう」

「……毎日外で遊んでられないもん」

お兄ちゃんと同じことを言うお姉ちゃんに対し、ちよつとだけむくれてみせます。ただお兄ちゃんと違い、お姉ちゃんは笑顔。

「ふふっ、それもそうね。エディだって女の子だもの」

ほら！ ほら見るだよお兄ちゃん！ お姉ちゃんは分かってくれてるよ！

「それで、退屈って言ったかしら？ だったら少し早いけれど、お昼ご飯の準備でも始める？ エディ」

「うー、それでも良いんだけど……お姉ちゃん、何読んでたのー？」

机の上、お姉ちゃんが開いていた数冊の本を覗き込んでみます。

「……………にゃんの本？」

噛んじゃったっ！ でもまあ、噛んじゃうのも納得してもらええると思います。お兄ちゃんがさつき黙々と書いていた書類？ と同じくらい難しい言葉が並んでるんだもん！
というか、

「えと……お姉ちゃん、こっちの文字は読めないんじゃないかなかったっけ？」

そう。言葉が通じるのに文字はお姉ちゃんのいた世界のものとは違うらしく、お姉ちゃんはこっちの世界の字は読めなかったはずなのです。お姉ちゃん本人に聴いたんだから間違いありません。

そのはずなんだけど……

「あら、だいぶ読めるようになったのよ？ 勉強したから」

「サラッと言うことじゃないよお姉ちゃん！」

勉強！？ 勉強って何！ どうやったの！ というか一週間勉強しただけでこんな難しい本が読めるようになったの！？ や、よく見たらテーブルの上には辞書らしきものも開かれていますけど、

それにしても難しすぎて頭がどかん！

「それで、何の本なのー？ これ」

「医学書……かしら。後はそれに関連して何冊か、ね」

「いがくしよ？ お医者さんの、あれ？ 病気とかお薬がたくさん載ってた……」

「ええ、そうよ」

エディだって読書は嫌いじゃないのです。だからこの書庫に置いてある本でエディに読めるレベルのものはよく読んでいます。その中には病気とかのことについて分かりやすく解説した本なんかもあるので、医学書というのがどんなものなのかは大体知っているのです。

でも、何で医学書なんだろう？

そんなエディの疑問に気付いたのが、お姉ちゃんは笑顔で付け足します。

「予想してはいたことだけど、この世界の人間と向こうの世界の人間にまったく違いが無くて良かったわ。もちろん魔力云々はあつたけれど、それさえ覚えておけば向こうでの知識がそのまま役に立ちそう。あ、エディ、そのこの棚の薬草の本取ってくれるかしら。右から三冊目」

「え、あ、えと、これだよね？ って、そうじゃなくてっ！ 何で医学書なの？ 知識って何？」

「ああ……私、向こうの世界で医者になれる程度の知識はあつたから。こっちでも覚えておけば何かの役に立つかと思つて」

何でも無いことのように答えるお姉ちゃん。でも、正直凄くびつくりです。

だつてお医者さんになるにはたくさん覚えるべきやいな

いわけで、なるのが難しいのはこっちだって同じ。エディにだって分かることです。それを普通にやっちゃうって、お姉ちゃんどれだけ凄いの？

「あれ？ でも、何で薬草の本なの？」

「それは大したことじゃないのだけれど、この屋敷の周りには向こうの世界では薬効のある植物とか群生しているみたいだから。調べたかったのよ。……ああ、あったわね。名前は違うものもあるけど見た目も効果も同じだわ」

「そうなんだ……良く分かんないけど」

「ふふつ、正直ね」

笑みを浮かべるお姉ちゃんに……ふと、思ったことを訊ねてみま
す。

「でもお姉ちゃん、読書するなら、お兄ちゃんと一緒にやれば読めない言葉とかすぐに訊けたんじゃないのー？」

「っ……………そう、ね」

いつもの調子で答えるお姉ちゃんですが、エディの目は誤魔化せません。いつもならちゃんと目を見て話してくれるのに、急に目を逸らすのは不自然すぎるよお姉ちゃん！

「お兄ちゃん、教えるの上手いよ？ エディ達に毎日勉強教えてく
れてるもん」

「そうね……………ええ、それは分かっているのだけれど……………」

よしつ。

「決めた！ お姉ちゃん、早くお昼作ろうー！」

「それは良いけれど……どうして？」

「お昼食べたらエディ、テオ達と外で遊ぶから。お姉ちゃんはお兄ちゃんと一緒にいること！」

「……え」

それまでずっと微笑んでいたお姉ちゃんでしたが、そこでその笑顔がちよっとだけ強張りました。

でもエディは遠慮なんかしないもん！

「お姉ちゃん、ずっとここにいてくれるでしょ？ それなのにいつまでもこんなにギクシャクしてたら、エディ達の方が居心地悪いよ」「そうでしょうね……」

ふふん。お兄ちゃんとお姉ちゃんがエディ達に激甘なことは、エディだって良く知っています。

予想通り、お姉ちゃんは最終的には折れてくれました。

エディの勝ちっ！

「……そういわけ、なの」

「なるほどな……」

話を聴き終え、俺は嘆息した。あの義妹ならやりそうなことである。

昼食の後。午前中は暇だと唸っていたはずのエディがテオとカイルを連れて出て行き、エレナと二人という状況に陥って……続く沈黙に耐え切れず、訊ねた結果が今の話だ。

まあ、エデイの言うことももつともではある。同じ家に住んでいるのにいつまでもこんな状態が続くのは、俺だって遠慮したい。

……したいのだが、ここ数年同年代の、それも異性と話したことと言えばせいぜい買い物や何かの際の事務的なものだけ。一人の固定した人間と、それもここまでじっくり話すことは、少なくとも保護施設を作つて以来一度も無かつたわけで……情けないことに、何を話せば良いのか分からないのである。

エレナもそれは同じなのか何とも複雑そんな微妙な表情で俯いていた。

会話に困つたらとりあえずテオ達の話をして切り抜けたりしていたが、それもそろそろ終わりにすべきなのだろう。

「そつといえばエレナ」

「何？」

「エデイに聴いたんだが……いつの間に読めるようになったんだ？ こつちの文字。どうやって？」

「ここ一週間で、かしら。こつちの世界　正しくはこの国ね。書く文字が違っただけで発音は同じみだったから、まずは発音を頼りに探すでしょう」

「……ああ」

そこからして不可能なのでは？　などと突っ込んではいけない。

この少女の凄さは、ここ一週間でよく理解したつもりだ。

「それでも分からなければ……闇楼国、あるでしょう。あの国の文字が、私のいた世界……いえ、正しくは国ね。私のいた国の文字にそっくりだったから、それを頼りにかしら」

「可能なのか、それは」

「とりあえず、読書に支障が無い程度にはなつたかしら」

笑顔で言う彼女に、思わず絶句する。

他国の言葉を勉強するというのは当然難しいことであり、いくら発音の方が同じとは言え難しくなくなるわけではないのだ。それを……読書に支障が無い程度。大体の言葉は覚えたのだと、少女は暗に言っていた。それをあつさり成し遂げて、しかしこの少女はまだ足りないかのような顔で笑う。

「この国の医学については大体分かったけれど、他国のものも見ないといけないわね……他国の医学書とか、あればいいのだけれど。ああ、そうなるとそっちの言葉も勉強するべきね……歴史書とかも読んでおこうかしら。後は魔法についても……」

「……とりあえず、もう少ししたら子供達に勉強を教えるのはエレナの役目になりそうだな」

苦笑しながら言うと、彼女は一瞬きよとした表情を浮かべ、そして微笑んだ。

「良いわね、それ。楽しそうだな」

「そういえば……」

「どうかしたのか？」

「いえ、少し気になったのだけれど。……どうしてエディ、あんなに拘っていたのかしら。私達の仲とか、私がここに居続けることに」

「ああ……そのことか」

「何か理由があるの？」

「あくまで仮説だが……そうだな、エレナには話しておくべきか。

あの子は 「

そして私は、知ることになる。

明るく振舞う少女の、時折見せる『影』の理由を。

幕間1 暇を持て余した少女の企み（後書き）

エディの一人称は書くのが難しいことを初めて知った。

というわけで一ヶ月ぶりの投稿となります。前話から読んで下さっている皆様、毎回待たせてしまってますみません。皆さんがいるから続きを書けてます本当に感謝。

そしていらっしゃるか分かりませんが初めて『在り処』を読んだという方。気に入ってもらえたでしょうか。その際は本編の方も読んでいただけると作者が泣いて喜びます。

そんなわけで、今回は『幕間』。章と章の間、シリアス成分多めな本編と違って若干シリアス少なめでお送りします。あくまで息抜きということですが……まあちょっとシリアス入れちゃった気がしなくも無いですが。

内容を見て貰えれば分かると思うのですが、『幕間』は前の章のエピソードであり、同時に次の章のプロローグにもなっています。そうなるように頑張ってます。

まあ、そんなわけで……今回の話を読んでくださった方は、「次はあのキャラの話か」などと想像してみるのも面白いんじゃないかなあと思ったり思わなかったり。簡単すぎますかそうですか。

そんなわけで、次章も楽しみにしていただければ嬉しいです。

ちなみに今回の話は、ただただエレナの凄さを書きまくりたかっただけで書いたものだったり

第二章 今はまだ消えない傷痕・前編

「わ、雪だー！ お姉ちゃん、雪だよ！」

「……そうね、もう十二月だもの。雪くらい降るかしら」

一ヶ月。私がこの世界へ来てから、もうそれだけの時間が経っていた。

少しだけ白く染まる地面に、なおも降り積もる雪。寒さに構わずその中ではしゃぎまわるエディに微笑み、少しだけ視線を空に向ける。

地図を見ると南にあるようにしか見えないこの国でここまで本格的に降るのは珍しいのではないか、とも思っけれど、実際はそうでは無いらしい。

と言うのも、どうやらこっちの世界では、向こうで言う『地球の公転面に対して地軸が』とかそういうことは季節の移り変わりに関係無いらしく。関係があるのは……あまり詳しく書かれたものは無かったけど、四種類の精霊とやら、かしら？ まあそこら辺はこれから調べるつもりだし、今は深く考える必要は無いか。

そもそもこの世界は構造なんかも未だ良く分かっていないらしく、地球のように自転しているのかも止まっているのかも不明なのだ。もしかしたら星が丸かったりすらせず、ずっと歩いていけばいずれ世界の果てとかに辿り着くのかもしれないし。

……まあ長く考えてはみたけれど、要するにこの世界では地域によって極端に暑かったり寒かったりはしない……寒暖の差こそあるもののせいぜい日本国内でのそれと同程度で、だからこの国で雪が降るのも別におかしくは無い、というだけだ。どうしてこの結論に至るのにこんなに難しく考えたのかしら、私。

「ねえ、お姉ちゃんってば！」

「え？ …… ああ、ごめんなさいエディ、どうしたの？」

「えつとね、大したことじゃないんだけど……あのねー、今日寒いし、夜はあつたかいものが食べたいなって思ってた」

「ふふつ、もう夕食の話？ でも、良いわね。何にしようかしら」

「あ、エディも作るよ！」

「ええ、ちゃんと手伝ってもらおうわ」

張り切るエディにそう返し……不意に私の心の中に、一月ほど前に聞いた、アレスの言葉が響いた。

他ならぬ、この少女のこと。私がここに居続ける事にエディが拘る、その理由。

『あの子は 実の両親に、精霊術のことを理由に嫌われ……違うな、そんな優しいものじゃない。虐待されて、捨てられているんだ』

彼はそんな彼女を拾ったのだという。まだ物心付いて間も無い、それなのに実の親に嫌忌され侮蔑され忌避され仇視され拒絶され、絶望に暮れる幼い少女を。

考えてみれば、納得……とまではいかないけれど、少しは分かることだった。生まれつきの精霊術者というのはとても珍しいらしく、その上このイグレスシア王国は他国に比べて精霊術者の迫害が目立つ。当時…… 5年前には既にそれを止めさせようという動きもあったらしいけれど、そう簡単に無くなるような浅いものではないのだろう。

そんなことよりも、不思議なのはこの子の態度だった。

それだけ親に自分の存在を否定されて、受け取るべき感情を与えられずに育って、本来誰よりも愛してくれるはずの人間に愛を教わらずに……それなのに。

何故、この少女はここまで明るく振舞えるのか。

何故、この少女はこんなに笑っていられるのか。

私は……失ってしまったとは言え、一時期は自分を理解してくれる存在が隣にいても、こうなってしまったというのに。

「エディ……貴女は、どうして」

「ふえ？」

きよとんと私を見上げる少女に、返すのは微苦笑。

「いいえ、何でも無いわ」

「……？」

それでも首を傾げるエディを促して、屋敷の中へと入る。……訊く必要なんて、本当は無かったから。

心の奥の奥、その答えを知っていると声を上げる私がいた。

「あの子はきつと、誰よりも怖がりなんだわ」

その日の夜のこと。

不意にそう呟いた私に、何やら書類を書いていたアレスが顔を上げて答えた。

「エディのことか？」

「ええ。あの子はきつと、嫌われることが何より怖くて、だから好

かれようと必死なのよ」

「よく分かるな」

感心するような彼に、ぽつりと。

「……貴方はきつと、両親に愛されていたのでしょっね」

一ヶ月もの間共に過ごしているのだ、彼にはもうそう呼べる存在がないことは知っていた。けれど、それでもあえて踏み込む。

アレスは驚いたように目を見開き……そしてその目を細めた。懐かしさと哀しみの入り混じった、そんな表情。

「そう、だな……両親だけじゃない。傍にいた大人、皆が俺のことを想ってくれた。それは覚えている。忘れちゃ、いけないことだ」

「そう。それじゃ、分からなくても無理はないかしら」

「何がだ？」

「自分を愛してくれる人間っていうのは、とても尊いものよ。特に、それを知らなかった人間にとっては」

「……エディのことなのかエレナのことなのか、判断に困る言い方だな」

「あら、エディの話をしていると思ったのだけど」

私は微笑み……しかしそれでも、心の底に浮かぶ思いは抑え切れず、歪む表情は見せたくなくて俯く。そして、恐らく震えているであろう声で、訊ねた。

「ねえ。どんな、気持ちなのかしら。愛される、って。愛してくれる人がいる、って……どんな気持ち、なの？」

それを聞いて、彼は驚いたような表情を浮かべ……そして苦笑。

「何だ、やっぱりエレナのことでもあったんじゃないか」
「いいえ、違うわ。だってあの子は、自分を愛してくれる人を見つけたから。だから、それを失うことを恐れるのでしょ」

私は首を横に振る。そう、それが境遇の似ている私とあの子の、最大の違い。

「私にはまだ、そんな相手はいないもの」

その言葉に、何故かアレスは呆れるような怒るような微妙な表情を浮かべて口を開きかけ、けれど何も言わずに閉じて嘆息。そしてその表情のまま、訊ねてきた。

「エディは？ それにテオやカイルもだ、十分エレナを慕っているだろう。分かっていると思うが珍しいぞ、あいつらにそこまで好かれるのは」

「そうね。慕われているのは知っているし、嬉しいし、ありがたいわ。けれど……愛情と尊敬は、違うものでしょ」

後半は目を伏せて、呟くように。

本当は、私にもそんなことは分からない。いいえ、『私には』分らない。愛情も尊敬も、その違いすらも、私は知らない。正の感情など分からない。かつてある少女が教えてくれたそれらは、彼女が姿を消した時に全て失ってしまった。本来誰よりも愛情というものを私に向けてくれるはずの両親からは、常に負の感情の羅列のみが向けられていた。

ああ、だから。

だから私は、逃げ出そうとしたのだけ。それに歪められる前に、

最早薄れて見失いそうな『自分』を保ちたい一心で。

彼らに出会った途端に向けられた、それまで知らなかった正の感情。私が私を取り戻す……どこるか、かつて彼女がいた頃以上に明るくなつたのは、きっとそれにあてられたからなのだろう。

そんなことを考えていると、突然目の前から笑い声が聞こえた。顔を上げると、アレスがおかしそうに肩を震わせている。

「ど、どうしたの？」

「エレナでも悩むことがあるんだな」

「失礼ね、私だって人間なのよ？」

嘆息混じりに言い返すが、アレスは笑うことを止めず、おかしそうに訊ねてきた。

「俺がそうだとはい、考えなかったのか？」

「へっ？」

思いも寄らぬ問いに、私は思わず普段なら出さないような間抜けな声を出してしまう。慌てて口を押さえると、それがまたおかしかったのかアレスはまた笑い出す。

「あ、アレスっ！」

「いや、すまない……エレナがそこまで取り乱すとは」

「誰のせいかしら」

赤面しているのを自覚しながら睨むと、彼はようやく笑うのを止め、けれどそのおかしそうな表情はそのままに私を見る。

「変な意味で言ったんじゃない。俺にとってエレナは、大切な友人

だから。愛情も友情も、信頼も尊敬も同じだよ。相手を愛していることは変わらないさ。愛の種類こそ違うが、本質は同じだ」

「……分から、ないわ」

そんな彼に私が返すのは、返せたのは捻くれた言葉。

だって、知らない。愛情も友情も信頼も尊敬も、それ以外の感情も、私は何一つ知らないのだ。それなのに、どこが違うとか、どこが同じとか、そんなこと分かるはずがないのに。

「ごめんなさい、変なこと訊いて。私、もう寝るわね」

「エレナ」

逃げるように立ち上がり、扉に向かう私を、アレスは呼び止める。そつと振り向いた私に、彼はいつの間にか笑みを消して、真剣な表情で。

「エディに……教えてやってくれ。自分が愛されているのだと。自分が大切にされているのだと」

「っ」

言い返そうとした。誰よりもそれを知らない私に、そんなことが出来るわけないと。あの子とずっと一緒に過ごしてきたのは貴方なのだから、貴方がやれば済む話だと。

けれど、同時に心のどこかで理解してしまっていた。これは、私にしか出来ないことなのだ。あの子と同じ痛みを知る私にしか、出来ないことなのだ。

親を愛し、親に愛されて育ったアレスでは、駄目なのだ。

「……おやすみなさい」

彼の言葉には答えず、私は部屋を出る。そして、彼に悟られないよう、そっと嘆息した。

「でも……一体私に、何が出来るの」

室内とは違い、寒気のする廊下で。その眩きは、白く宙に消えていくばかりだった。

「お姉ちゃんおはようっ！」

「朝から元気ね？ おはよう」

苦笑しながら、自分に抱き着くエディの頭を撫でるエレナ。その彼女の表情が、俺に向けられたところで僅かに強張った。

俺はそれに気づかないふりをして、普段通りの笑顔を浮かべる。

「おはよう。毎朝律儀にエディの相手をする必要はないんだぞ、エレナ？」

「……ええ、おはようアレス」

「あーっ、お兄ちゃん酷い！ お姉ちゃんとは大違いー！」

今度はこっちに走り寄ってくるエディを受け止め、再びエレナに目を送る。……今度は気まずそうに逸らされた。

そんな俺たちを見て、エディは何か言いたそうにしながら、しかし何も言わずに席に着く。一瞬だけ居心地の悪い静寂に包まれるが、それはドアの開く音で壊された。

「ふああー、おはよ」

「…………おは、よう?」

「あ、テオもカイルも遅いよー! おはよ!」

「いやエデイが無駄に早いだけだろ…………いただきます」

「早っ! 食べ始めるの早いよテオおー! いただきますーすっ!」

我先にと食べ始める二人をちらりと見て、カイルがこっちに視線を寄こす。その意味を汲み取ったのか、エレナは苦笑。

「そうね、私たちも食べましょうか」

「う、うん…………いただきます」

「いただきます」

俺もまた席に着き、テーブルに並べられた、相変わらず異様に完成度の高い料理を口に運ぶ。ふと見ると子供たちが何事か視線を交わし合い…………やがてテオが諦めたように嘆息し、しばらく続いた無言を打ち破るかのように口を開いた。

「えつと…………アレス兄とエレナ姉、喧嘩でもしたのか?」

「テオ、直球すぎーっ!」

エデイが呆れたようにテオを叩く。その横で、躊躇いがちに口を開くカイル。

「でも…………今日、変。お兄ちゃんも、お姉ちゃんも」

…………と、断言されてしまうと反論のしようがないわけで。

どう返そうか考え込む俺とは逆に、エレナは彼らの言葉を聴いた瞬間笑顔を浮かべていた。

「喧嘩、というほどでもないの。三人とも、気にしないで」

「本当に？ お兄ちゃんもお姉ちゃんも、喧嘩したわけじゃない？」

「ええ、大丈夫」

なお訊ねてくるエディに対してエレナが笑顔を浮かべると、テオたちから不安そうな表情は消えた。

……彼女の笑顔の裏にとっても暗い何かがあるように感じたのは、どうやら俺だけだったらしい。

「喧嘩だったら、ここまで気まづくはならないだろうな」

朝食を終えると同時、子供たちは外へと駆け出して行った。現在子供たちに勉強を教えるのは俺とエレナが一日おきに交代で行い、三日目は休みということにしている。今日はその休みの日に当たるため、彼らのテンションはいつもより少しだけ高い。

逆に、後片付けを終えて再び俺の対面に座ったエレナは、居心地の悪そうな表情を隠そうともせず苦笑した。

「そうね」

「……やはり俺のせい、か？」

何気なく呟くと、エレナは一瞬驚いたように俺を見た後、苦笑交じりに首を横に振った。

「いいえ、違うわ。……そうね、貴方の言葉も、原因の一つではあるでしょうけど。一番の原因は、やっぱり私」

僅かに。その笑顔が、自嘲の色を帯びる。

「エディを助けたのは貴方だけれど、貴方では本当の意味であの子を救うことは出来ない。私でなければ、きっとあの子を救えない。それは、分かっているの。救ってあげたいと、思うの。……それなのに、分からない」

テーブルの上で組まれた白い手に、ぎゅっと力が込められる。見ただけで分かるほど、強く。

「どうすればいいの？ どうすれば、あの子を救えるの？ どうすればあの子は、自分に向けられた愛に気づいてくれるの？ 自分のことすら分からない私が、どうやってそれをあの子に伝えればいい？ ……そうやって、考えているうちに、どんどん分からなくなっ
て」

「難しく考えすぎだ」

思わず笑つと、エレナが困ったように俺を見た。

「真面目に言っているのよ、私」

「ああ、知っているさ。だが、そこまで難しく考える必要はない」
「……でも」

「急がなければいけないわけではないだろう？ 時間はたくさんあるんだ、ゆっくり気づかせてやればいい。少なくとも、今のエディは笑顔でいることが出来るのだから」

「あら、それは私への当てつけかしら」

僅かに拗ねたような表情を浮かべるエレナに対し、俺は苦笑する。
……彼女が笑わなかったのは初対面の頃だけで、むしろ最近に至っては常に微笑を浮かべているし、時にはこうしてそれ以外の表情

も見せてくれるのだが、それは口に出さず。

俺が何も言わないのを見て、エレナは嘆息。

「そう……そう、ね。焦る必要なんて、どこにも無いのよね……」

ぎこちなく、笑顔を浮かべる彼女。今朝までその裏にあった暗闇が薄れたのを確認して、俺もまた笑みを返す。

……そんな俺たちを、嘲笑うかのように。

異変が起きたのは、その日の夜のことだった。

「じちそうさま……」

小さく、まるで呟くようなエディの声。驚いて彼女の方を見ると、その前には殆ど手を付けていない食事があった。

「いらないのか？ エディ」

「んー、食べたくない……ごめんね、お姉ちゃん」

アレスの問いに首を振り、申し訳なさそうに私を見るエディに、苦笑を返す。

「いえ、それは良いのだけれど……」

席を立ち、エディの方に歩いていく。近づいてみると、やはり顔

色が悪いのが見て取れる。だるそうな表情を浮かべて私を見るエディの額にそつと手を当てて、私は嘆息した。

「やっぱり……熱いわ。ただの風邪だと良いのだけれど……立てる？ エディ」
「うー……」

こくん、と頷いて立ち上がるエディ。途端、不安定に傾ぐ小さな体を、私は慌てて支える。

「ごめんなさいアレス、部屋まで連れて行ってあげてくれるかしら」
「ああ」

躊躇いなくエディを抱き上げ、出ていくアレス。それを見送って、私は息をついた。

薬を取りに行こうとしたその時、つんと服を引っ張られる感覚。そちらに視線を向けると、カイルが泣きそうな顔で私を見上げていた。テオもまた、心配そうな表情で私を見ている。

「……エディ、大丈夫……なの？」

そんなカイルの問いに私は苦笑し、彼の頭を撫でた。

「ただの風邪だと思うわ。安静にしていれば治るから、貴方たちは心配しなくて大丈夫」

「でも、エディが風邪なんてひくの、初めてだ」

「人は意外に繊細なのよ、テオ。少し環境が変わっただけでも体調を崩すことはあるの。そうね、例えば……日常生活に紛れ込んだ、私というイレギュラー、とか」

「っ！ エレナ姉は……っ」

反論しようとしたテオに対し、私は人差し指を口に当てて、『静かに』の仕草。

「エディが眠れなくなるわ、テオ」

「……それに、お姉ちゃんが来たとき……一番警戒してたの、テオだったくせに」

「お前らいつまでそれを引っ張るんだよ……」

僅かに落ち込むテオに、私は微笑を向けた。

「ふふつ、テオはただ、家族想いなだけよね。そう言ってあげれば良いじゃない」

「……エレナ姉、嬉しいけどそれ自分で言ったらただの嫌な奴だと思っ」

呟き、テオは「よしっ」とカイルの腕を引く。

「ほら、さつさと食べるぞカイル。エレナ姉はさつさとエディのとこ行って、早く治してやってよ。やっぱエディがいなくてつまらないし。ここは俺とカイルが片付けるからさ!」

「まあ、大丈夫なの?」

「か、片付けくらいなら、多分……」

「ぼく、出来るよ」

自信なさげなテオと、逆に嬉しそうなカイル。そんな二人の少年に、私は笑いかけた。

「じゃあ、お願いするわね」

薬と水を手に、エディの部屋に向かう。

この世界には、元いた世界のように市販されている薬など無い。薬屋に行けば薬草を調査した薬は手に入るけど、自分で調査する知識があつた方がいざというときに便利だし、その方が安心だろう。だから、私が今持っているものも少し前に自分で調査したものだった。

部屋の前に着くと、ちょうどアレスが部屋から出てきたところだった。彼は私の姿を認め、ほっとしたように息をつく。

「エレナか、ちょうど良かった。着替えさせるの、頼んで良いか」

「ああ……それがあつたわね。そうね、私がやるわ」

頷き、アレスの横を通って中に入る。

ベッドに横たわる小さな体は儂く、今にも消えてしまいそうに見える。まるで、初めてこの子に出会った時のように。

僅かに歪む少女の表情から、彼女が悪夢を見ていることを悟る。けれど、それを私がどうにかしてあげることが出来ない。出来るのは、ただ看病することくらい。だから私はアレスに頼まれた通り、彼女を着替えさせようとエディの身体を起こす。エディが目覚まさないように、そつと。

服を脱がせかけたところで、私は『それ』に気づいた。

「……何、これ」

思わず、息を呑む。知らず、エディの服を掴んでいた手が震え、

眠る彼女への配慮など忘れて上半身の服を剥ぎ取った。

その下にあったのは、無数の傷跡。

消えかけた痣。いくつも残る、大小様々な裂傷。火傷の痕。

……この子は虐待されていた、というアレスの言葉が蘇る。彼女の身体に刻まれているのは、紛れも無くその痕だろう。小さな身体で背負うには、きつと重すぎるであろう過去の、爪痕。

「ふふっ」

だけど、それを見た私の口元は、自嘲気味に歪んだ。だって、私の方が

「っ」

不意に、エディが呻く。慌てて視線を戻すと、ばちっと思開いた少女の瞳とぶつかった。

「あ……」

呟いたのは、どちらか。エディは自分の姿に気づくと、慌てて私を突き飛ばし、身体を隠す。恥じらい……というよりは、むしろ傷を隠すように。

「見た、の？」

俯いたまま、けれどどこか呆然とした口調の、エディの問い。私が黙っていると、聡い少女はそれだけで答えを知ったようだった。謝りたかったけれど……エディがそれを望まないのは、私がよく

知っている。私だって、同じ。謝られたら、そんな傷を持つ自分自身の存在が、許されていないように思えるから。

「……出てって」

「エディ」

「ごめんね、お姉ちゃん。一人になりたいの」

呟くようなその言葉に含まれる、拒絶。一筋縄ではいかないことを悟り、私は息をついて彼女に微笑みかけた。

「そう。それじゃ、着替えはここに置いておくわね。薬も、苦くは無いですだから。私は部屋にいるから、何かあったら呼んで」

答えないエディを残し、部屋を出る。扉を閉める間際、耳に届く囁き声。

「……もう、やだよ……や、なんだよ」

常人には聞こえないほど小さなその声は、けれど恐ろしいほどはつきりと、私に助けを求めてきていて。

「結局、貴方の思い通りになってしまいそうね？ アレス」

薄く笑みを浮かべて、私は呟いたのだった。

本当は、お姉ちゃんを引き留めたかった。部屋を出ていくお姉ちゃんから目を逸らして、でも心の中では、行かないで、って叫んだ。

それでも……お姉ちゃんも受け入れてくれるかどうかなんて、分からないから。分からなかったから、ちょっとだけ考える時間がほしかった。

お姉ちゃんの声で目を覚ますまで、ずっと夢を見ていた。

夢の中で、エディは『わたし』は、泣いてた。凄く熱くて、痛くて、苦しくて、誰か助けられて叫んだ。

何で、あんなに熱かったんだろう。一人になってしまった部屋で、わたしはぼんやりと考える。体を起こしてるのが辛くなって、ベッドにぼすっと倒れ込んだところで、やっと気づいた。

誰も近くにいないから、怖いんだ。お兄ちゃんもお姉ちゃんも、テオもカイルも、傍にいてるって感じられないから、怖くて痛いんだ。

また、一人ぼっちになっちゃったみたいで。

「薬飲まないで、寝なかつたら……熱、上がったちゃうのかな」

テーブルの上をちらりと見て、呟く。大人しく寝てなきや熱が下がらないことは分かっているし、早く治して遊びたいけど、でも。

「……寝るの、やだな」

寝たら、きつと夢を見る。さつきまで見てた、悪い夢の続き。
夢の中のわたしは今よりずっと小さくて、笑うことも泣くことも
知らなくて、光の無い死んだような目をしてて、今よりずっと傷だ
らけだった。

『化け物！』

そう言ったのは、誰だったっけ。みんな、わたしをそう呼んだ。
響く叫び声、石のぶつかった肩や背中痛みを思い出して、わたし
は目を閉じる。

今は、しあわせ。わたしを、『エディフェル』トリエルト』を認
めてくれるお兄ちゃんと出会えた。同じくらい辛い過去を持つ、同
じくらい強い力を持つ、テオやカイルと出会えた。

誰も、わたしを化け物と呼ばない。わたしは化け物なんかじゃな
いんだって、私は人なんだって、初めて知った。

……でも。

わたしのこの傷を見ても、お姉ちゃんはそう思ってくれたかな。

「……やだよ。お姉ちゃんに、嫌われたくないよ……」

枕に押し付けた目から、じわりと涙が滲んだ。

第二章 今はまだ消えない傷痕・前編（後書き）

お久しぶりです。だいぶ間が空いてしまいましたが、何とか皆さんのもとにお届け出来ました。『在り処』第二章になります。

『幕間』による予告通り、今回は子供たちの紅一点であるエディのお話。普段は『保護施設』のメンバーの中で一番明るい彼女ですが、背負う過去は誰よりも暗く辛いもの。そんなエディの傷を、エレナに癒すことは出来るのでしょうか。

また、更に凄惨なエレナの過去も少しだけ顔を覗かせます。エディの傷を見た時に彼女が見せた、歪んだ笑顔。その理由は恐らく、後編で語られることでしょう。

シリアス展開のまま終わらせてしまいました。後編を楽しみにして頂けると嬉しいです。

それでは、後編でまたお会いできることを願って。

第二章 今はまだ消えない傷痕・後編

「で、何があつたんだ？」

いつものように朝食を終えるなり駆け出して行った子供たちを見送って、俺は彼女に訊ねる。恐らく、呆れた表情で。

エディの熱は幸い一日で下がり、二日経った今日は普通に走り回るほど回復した。それは良い。

だが……その間、少女はエレナと全く口をきいていなかった。違和感を覚えていたのは俺だけではない。テオも、そしてカイルも。普段はことあるごとにエレナに抱き着き、甘えていたエディが、まるでエレナを無視するように振る舞っているのだ。おかしく思つて当然だろう。

しかし俺の問いに、エレナは困つたように苦笑。

「ちよつと……あの子の地雷を踏んでしまった、みたいね」

「ああ、傷か」

その言葉に思い当たることがあつたので頷くと、エレナが恨めしそうに見上げてくる。

「……分かつていて、あんなこと言つたのね？」

「エレナならどうにか出来ると思つたからな」

「その結果がこれ、なのだけれど」

「ここで諦めるようなエレナじゃないだろう？」

笑みを向けると、彼女はきよとした表情を俺に向ける。

「何故、断言出来るの？」

「これでも、一ヶ月は君と一緒にいるんだがな」

肩を竦めると、エレナは目を見開き、次いでその頬を僅かに染める。悟られないよう必死で表情を戻そうとする彼女を、俺は吹き出しそうになるのを堪えて見つめた。

どうも、この少女にはそういうところがあった。自分が凄いと必要だとも考えない。出来ないなどあつてはならない。そんな異常な彼女の常識は、どうやら彼女にとっての彼女の価値を低くしているらしい。他人を救うためなら自分を犠牲にすることを厭わない、そんな厄介な思考回路の持ち主なのだ。

……だからこそ、危なっかしくてしょうがない。ある意味、この家で一番目を離せない少女だった。

「どうしたの？ アレス」

「……いや、何でも無い。それで、エディの傷を見たのだろうか？ 具体的には何をするつもりなんだ、エレナ」

「あら、相手を傷つけてしまったら謝ることも、喧嘩したら仲直りすることも、常識よ」

「それだけでは解決しないのは、君が一番よく知っているだろう」
「ふふっ、そうね」

自らの腕を、血が止まりそうなほどきつく握って、彼女は笑う。その笑顔の中に、どこか違う感情を滲ませて。

「見てしまったのだから、見せるわ。あの子が怯えるのはきつと、自分が他と違うから。そのせいで嫌われることを恐れているのよ」
「よく、分かるな」

「だって、私と似ているから」

答える声は凜としていて、けれどその表情は真逆。

「だから、同じだって教えてあげるの。……最終的に嫌われるのは、私の方かもしれないけれど」

切なげに笑う彼女を見て、俺は知る。

さっきの自分の考えは、恐らく正しいであろうことを。

「エレナ、君は……何をしようとしているんだ？」

「さあ、何かしら」

彼女の顔に浮かんだ笑みは、けれどどこか歪んで見えた。

「どろじょうぶ……」

ベッドの上で、膝を抱えて、わたしは一人頭を悩ませていた。

お姉ちゃんを避けているのは、わざとじゃないのだ。本当は、話
がしたかった。傷のことを話して、昔のことを全部打ち明けて……
それでもお姉ちゃんならきっと、受け入れてくれるって信じたかつ
た。だからあの時、お姉ちゃんを部屋から追い出した後、確かにそ
う決意したはずなのに。次の朝、お姉ちゃんを見た瞬間。わたしは
拒むように顔を背けていた。

話したいのに。お姉ちゃんに抱き着いて、甘えたくて、堪らない
のに。

それなのに、怖い。怯える心が、邪魔をする。

どうしよう。ずっとこのままだったらどうしよう。せめて、謝らないといけないのに。あの時お姉ちゃんを拒んでしまったこと、それからずっと避けてること、謝らなきゃいけないのに。そうしなきゃわたしは、お姉ちゃんに教わったことすら守れない悪い子になってしまう。そんなわたしは、きっと要らない。

「エディ」

不意に、部屋の入り口から声がした。それはよく聞き慣れた…… たった今まで考えていた、お姉ちゃんの声。

思わず固まる私に構わず、お姉ちゃんは訊ねてくる。

「入って良いかしら？ 少し、言いたいことが それと、見せた
いものがあった」

「……いい、よ」

呟くように、答える。聴こえなかったかな、とも思ったけど、どうやら聴こえたみたいで、お姉ちゃんはそつとわたしに近づいてきた。……そういえば、耳、凄く良いんだっけ。

そんなお姉ちゃんを視界から追い出すように、わたしはぎゅっと目を閉じる。ベッドの上、わたしのすぐ傍に、お姉ちゃんが座ったのが分かった。

少しだけ、流れる沈黙。

それを破るように、お姉ちゃんの声が聴こえる。

「ねえ、エディ。見せたいものがある、って言ったわよね。少しだけで良いの、こっちを見てくれないかしら」

その言葉に、わたしは少しだけ躊躇ったあと、振り返った。そこにはいつも通り、穏やかな微笑みを浮かべたお姉ちゃんがいる。

「お姉ちゃん……あの」

「見ている」

わたしの言葉を遮り、お姉ちゃんは自分の腕を上げて、袖を捲った。わたしとお姉ちゃんの間、二人に見えるように。

傷一つない、綺麗な白い腕。わたしは自分の傷だらけの腕を思い出して、思わず顔を背けようとする。けど、お姉ちゃんはそれを許してくれなかった。

「エディ。見ている、と言ったわ」

そう言って、もう片方の手で腕を撫でる。その手の下にある色が変わったように見えて、息を呑み……

「っ！」

その息すら、止まった。

「う……あ……」

「ね？」

微笑むお姉ちゃんの腕は、傷だらけだった。わたしよりも、かつてのわたしよりも、ずっと。

私の腕にあるような火傷や裂けた傷痕は、殆ど無い、けど。

刃物で切ったような痕がある。刺したような痕がある。……抉っ

たよくな、ぐちゃぐちゃの傷痕が、たくさんある。

怖かった。

「……わたしより、ひどいよ」

「ええ、そうでしょうね」

あっさりと認めるお姉ちゃんが、怖い。自分の身体が、震えているのに気付く。

怖い、怖い。私の傷を見た人も、もしかして、こんな感情を抱いていたんじゃないだろうか。そう思うと、凄く怖い。

まるで言い訳するかのように、自然と言葉が漏れた。

「お姉、ちゃん……わたし、ね。嫌われるの、怖いの。もう、化け物なのは、やなの」

化け物。人と会ったたびにそう叫ばれて、石を投げられた。家に帰ればわたしを生んだ人が、憎々しげにわたしを睨んで。

『お前みたいな化け物、生まれて来なければ良かったのに』

叫んで、殴るのだ。

お母さん、と呼んだことは、一度も無かった。呼ぶことを許してもらえなかった。うっかり口を滑らせれば、いつもの数倍殴られた。そして……エディ、と呼ばれたことも。

家を出て行った『お父さん』がつけたという自分の名前を知った

のは、捨てられる前日のこと。その時までわたしに名前は無くても、わたしにとっても他の人にとっても、わたしは『化け物』でしかなかった。

自分を化け物なんだと、信じて疑わないわたしがいた。

けど、化け物なんかじゃないと、言ってくれた人たちがいた。

お兄ちゃんも、テオも、カイルも。わたしの過去を知っても、傷痕を見ても、気にせず家族と言ってくれた。凄く嬉しくて、そして怖かった。また嫌われたらどうしよう、そう思うと凄く怖かった。やっぱり止めた、お前なんか知らない、お前みたいな化け物は家族じゃない……そう言われるのが、物凄く怖かった。

「嫌われたく、ないよ……昔なら、我慢できたのに。今は、やだ。嫌われるのも、一人なのも、化け物なのも、嫌なの。怖い、よ」

気付けば、わたしはしゃくりあげていた。

捨てられるのが怖い。だから、わたしは良い子じゃなきゃいけない。元気で、明るくて、悪戯もするけど聞き分けの良い、皆に好かれる『良い子』じゃなきゃ。

「お願い、お姉ちゃん」

だけど、出来なかった。わたしは、『良い子』でいられなかった。お姉ちゃんを拒絶して、避けて、お兄ちゃんやテオやカイルに心配をかける『悪い子』に、なってしまった。

今も、お姉ちゃんに心配を……迷惑をかけてるって、分かっているけど。

「きらいに、ならないで」

ずっとずっと、心の中で叫んでいた言葉。一度も言ったことの無かったその思いを、初めて誰かに伝えた。

「ちゃんと、良い子にしてる、から。だから、わたしを捨てないで。エディのこと、嫌いにならないで。お願いだから、もう」

一人にしないで、と。叫ぶ前に、ふわりと柔らかい温もりに包まれた。

「お……お姉、ちゃん？」

少し遅れて、気付く。お姉ちゃんが、わたしを抱き締めていた。

「ねえ、エディ。初めてここに来たときに私が言った言葉、覚えてるかしら。私を信じてほしい、そう言ったと思うのだけれど」

「う、うん。言った、けど」

わたしはお姉ちゃんが何を言いたいのか分からなくて、戸惑ってしまう。自分を包むこの温かさが、感じたことのない心地よさが、どこか気恥ずかしくて。でも、離れたくなくて。

「でも、気付いたの。頼んで信じてもらうのでは、駄目。相手を信じなければ、心から信じてもらうことなんて出来ないわ」

きゅっ、つと。お姉ちゃんは、わたしを抱きしめる腕にほんの少しだけ力を込めた。

「だから、私はエディを信じるわ。エディが私を信じてくれなくて

も。貴女の過去に何があっても、この先貴女が何をしたとしても、私だけはエディの味方である。私は、同じ痛みを知っているから。だから、決して貴女を見捨てない。

エディは、一人じゃないわ」

「あ……」

目を見開く。抱き締められた驚きで止まっていたと思っていた涙が、再び溢れてきた。

本当は、ずっと……誰かに、そう言っただけだった。

精霊術者でもそうじゃなくても、『良い子』でいなくても、それでもわたしの傍にいと、言っただけだった。

お兄ちゃんはお父さんを手助けしてくれたけど、「俺はエディの味方だ」、そう言っただけで、ずっとそうであるとは言わなかった。

テオやカイルは大事な兄弟で、大切な親友で、そして数少ない仲間だけど、だからって無条件で信じることは、わたしには出来ない。血の繋がった実の『お母さん』すら、わたしの敵だったから。

だから、言葉にして、伝えてほしかったんだ。愛されて育ったお兄ちゃんたちではなく、私と同じ痛みを知っている人に。

「う……っく……うわあああああああああああああああああああああ
あああん！」

温かい腕の中。

生まれて初めて、声を上げて泣いた。

「そうだ、エディ。先に謝っておかなければいけないわね」

私が声を上げたのは、少女が落ち着いて少ししてからのことだった。いえ、今も肩を震わせ涙を流してはいるけれど、話は出来るでしょう。

真つ赤な目で私を見上げるエディに、私は微笑む。

「傷。勝手に見て、ごめんなさい。謝られるのは嫌でしょうけれど、それでも……見られたくないものを私が見てしまったのは、事実だから」

「う、ううん。わたしも、避けたりしてごめんなさい。……あの、お姉ちゃん」

再び俯き、エディは遠慮がちに訊ねてきた。

「訊いても、大丈夫？ あの傷のこと……わたしのは、知ってるんだよね」

「……ええ、そうね。知っているわ」

予想出来ていた質問に、私は嘆息を返す。あれを見せてしまったのだから、いつまでも隠せるわけが無い。話してしまった方が、私も楽だろう。

「約束してくれる？ エディ。今から話すこと、テオやカイルには絶対に言わないって」

「どつして？」

「今はまだ、話すべきじゃないから」

無理に話しても、彼らを混乱させるだけ。いつか、話す機会が来るだろう。その時に話せば良いことだ。

エディは小さく唸った後、なおも訊ねてくる。

「お兄ちゃんには？」

「彼には……そうね、私から話すわ」

一瞬、黙っていてと答えようとする。けれど、エディのことだ。そんなことを言えば絶対、アレスに全て教えてしまっただろう。それよりは自分で語る方が良い。……エディにあんなことを言っておいてアレスを信じないのは、どうかと思うし。

エディは真剣な顔で少し考え込むと、顔を上げた。

「言わないよ。絶対、言わない」

「……そう」

私は少し微笑み、少女から視線を逸らす。

「大体は、エディと一緒に思うわ。この傷をつけたのは、実の両親だから。……いえ、それだけじゃないわね。それ以外の、私より強かった人間全員、かしら」

「エディより酷いよ!」

驚きのあまり、だろうか。普段の口調で叫ぶエディに、私は苦笑を返した。

「そういう家に生まれてしまったのよ。皆が『異能』……こっちの

魔法に近いかしら。とにかく、そういう不思議な力を持つ家。私はその跡取りだったけれど、能力はそこまで高くなかった」

全て、あの子のせいで。

心の奥、静かに首をもたげる憎悪を、そっと押し返して私は続ける。

「毎日、修行という名の戦闘を繰り返した。それも、生きるか死ぬかの瀬戸際と言っても過言ではないほどの……ね。客観的に見れば私は弱くは無かったけれど、決して強くも無かった。数日おきに死にかけていたわ」

それほどの大怪我を負っても治療の能力を持つ人間に治されて、動ける程度に回復すればまた戦う。もちろんそんな状態で勝てるわけも無く、また負けて……最初の頃、まだ自分より強い相手との戦い方が分かっていなかった頃は、ずっとそんな状態だった。

異能による攻撃は、武器によるそれより多様。痕を残さず苦痛だけを与える悪趣味なものもあれば、肉を抉り取っていくような残酷なものまである。だからこそこの、この傷痕。

「……だから、『逃げてきた』って言うってたんだね」

「あら、覚えていたのね」

呟くエディに、私は苦笑を返す。出会ったときに零した言葉を、この子はしっかりと覚えていたらしい。

「そうよ。成長するにつれて負けることは減ったけれど、あの家にいることはとても苦痛だったから。だから、逃げたの。もちろん追われて、もう少しで捕まりそうだった。けれど」

「そこで、こっちに飛ばされたんだね」

「ええ、その通り」

納得したような表情のエディ。私はそれに頷きながら、ふと思いで出す。逃げてきた、と語った私に、エディが返した言葉。

この子は……私が逃げてきたことを、良かったと言ったのだ。

「……そうね。私も、逃げてきて良かったと思うわ」

「ふえ？」

唐突に呟いた私の言葉に対して、首を傾げるエディ。その頭を撫でて、微笑む。

「貴女たちに出会えた。こうして、貴女を救えた。だから、今は後悔してなんかいないわ。あの時逃げ出したこと」

「……うん」

私の言葉を聞いたエディは、驚くように目を見開き、そして嬉しそうに微笑んだのだった。

「そういえばお姉ちゃん、医学とか凄く詳しいけど……それも、向こうで勉強したのー？」

しばらくして、すっかりいつもの調子に戻ったエディは思い出したように訊ねてきた。私はそれに首肯を返す。

「ええ。読書くらいしか、楽しめることは無かったから。幸い家には物凄くたくさんの本があったから、片っ端から覚えたわ。読唇術も、そういう本があったから」

「どんな本!？」

叫ぶエディに、思わずくすくすと笑みを零す。

「そういう家だったのよ」

「凄すぎるよー……もー、お兄ちゃんもお姉ちゃんも、出来ないことあるの!？」

「ええ、たくさんあるわ。だから協力するの。……そうだ、エディ
「なーに？」

「その傷、消したい？」

何気なく訊ねると、一瞬エディの息が止める。少しして、エディは笑みを消して、かすれた声で訊ねてきた。

「消せる、の……?」

「分からないわ」

私の答えに、少女は僅かに落胆の表情を見せる。そんなエディに、私は微笑みかけた。

「けれど、私は消したいと思っているの。この世界の医学について調べているのは、そのことも関係しているのよ?」

「……どういこと?」

「向こうの世界の医学では、この傷を消し去ることは出来なかった。そういう『異能』を使っても、ね。だけど、この世界ならどうかしら」

魔法が、精霊が、龍が。

そんなものが存在する、この世界なら。

「向こうほど国と国との交流が盛んではないところもあるし……この国に無くても、他の国にはそんな技術があるかもしれない。どんな傷痕も消せる、そんな魔法がどこかに存在するかもしれない」

そして、何より……

「今ある魔法では出来ないことも、精霊術なら出来るかもしれない……ねえ、エディ」

目を見開いて私を見つめる少女に、笑顔を向ける。

「貴女もまた、その傷を消したいと願っているのなら。私に、協力してみない？ 助けてほしいの。貴女に。貴女の、その力に」

「エディ、に……？」

「そう」

「……エディの力で、この傷を消せるの？ お姉ちゃんのことも、助けられるの？」

「貴女がそう望むなら、きっと」

頷くと少女は再び、幸せそうに笑った。

「エディ！ オレの部屋のドアに変な魔法かけたのお前だろ！？」
「えー、何のこと？ エディ知らなーいっ！ むやみに人を疑っちゃういけないんだよ、テオ！」

「嘘吐けっ！ この家であんなことするのエディくらいだ！ な、

カイルだつてそう思うだろっ」

「違つてば！ カイルはエディの味方だよね？」

「……………え、う……………え、っと」

二人に笑顔で迫られ、困り果てたようにこちらを見るカイル。それに対してくすくす笑いながら「頑張つて」と非情な言葉を返すエレナに、俺は苦笑を向けた。

「すっかりいつも通りだな……………いや、エディの悪戯が増えたか」

「ふふっ、安心してているのよ」

何がおかしいのかいまだに肩を震わせるエレナ。彼女は彼女で、あれ以来笑顔が増えたように見えた。……………部屋に乗り込んでくるなり服をはだけさせたのには、流石に驚いたが。俺だつて健全な男なのだから、その辺りを考慮していただきたい。

それでも、俺にあの傷痕のことを打ち明けてからは、それまで表情の裏にあつた陰が少しだけ薄れていた。まだ完全に無くなったわけではないが……………いずれ全て話すと、彼女は言った。ならば信じようと、俺はそう決めていた。

「どうしたの、アレス？」

「いや、何でも無い」

訝しげにこちらを見てくる彼女に微笑を返すと、彼女は「そう」と笑つて子供たちの方に視線を戻した。

テオとエディの口論は、いつの間にか取っ組み合いの喧嘩にまで発展したらしい。

「カイル」

苦笑混じりに呼ぶと、そんな二人を見ておろしていたカイルはほっとしたように俺たちの方に駆け寄ってきた。

「一体何があったんだ？」

「え、とね……エデイが、テオの部屋のドアに、魔法かけて……それに引つかかって、テオが怒ったの」

「あら、どんな魔法？」

「……分かんない」

エレナの問いに、カイルは首を傾げる。……相手をテオだけに限定する辺り性質が悪いな、エデイ。

「そういえばエレナ。エデイが安心していってたな、さっき。

……どういうことだ？」

「貴方たちに嫌われて捨てられる心配が無くなったから、よ」

「捨てるわけがないだろう」

「うん。エデイ、好き、だよ？」

思わず眉を顰める。エデイの過去は知っているが……だからこそ、俺たちがエデイを捨てるわけが無い。彼女が何をしても。

カイルも頷くが、エレナは困ったように笑って首を横に振った。

「思っているだけでは駄目、なのよ。……カイルも、覚えておいてね。女の子は、言葉にして伝えてもらわなければ不安になるものだから。今回ののは、それとは少し違うけれど」

「ああ……なるほどな」

性別による違い。思考の方向が違うからこそ、伝える必要がある。要するに、そういうことなのだろう。

「う……？」

「カイルにはまだ早いか」

首を傾げるカイルの頭を撫でながら、俺は苦笑を零すのだった。

数か月後、彼女のこの言葉を思い出すことになるとは知らずに。

第二章 今はまだ消えない傷痕・後編（後書き）

さて、第二章はこれで完結となります。第一章よりだいぶスムーズにお届け出来ました。次の章が書きあがるのは果たしていつになることやら……

第一章と比べてだいぶ短くなってしまいましたが、そしてほのぼのと言いつつ大半がシリアスでしたが、楽しんで頂けたでしょうか。

第一章から期間が空いたにも関わらず読んでくださった方がいるようで、ちょっと小躍りしております。これからも来てくださると嬉しいです。

次は幕間2を経由して第三章になります。まだまだほのぼのとシリアスが混在していきますので、楽しみにしていてください。

では、幕間2でお会いできることを祈って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1708k/>

幸福の在り処

2011年12月2日01時54分発行